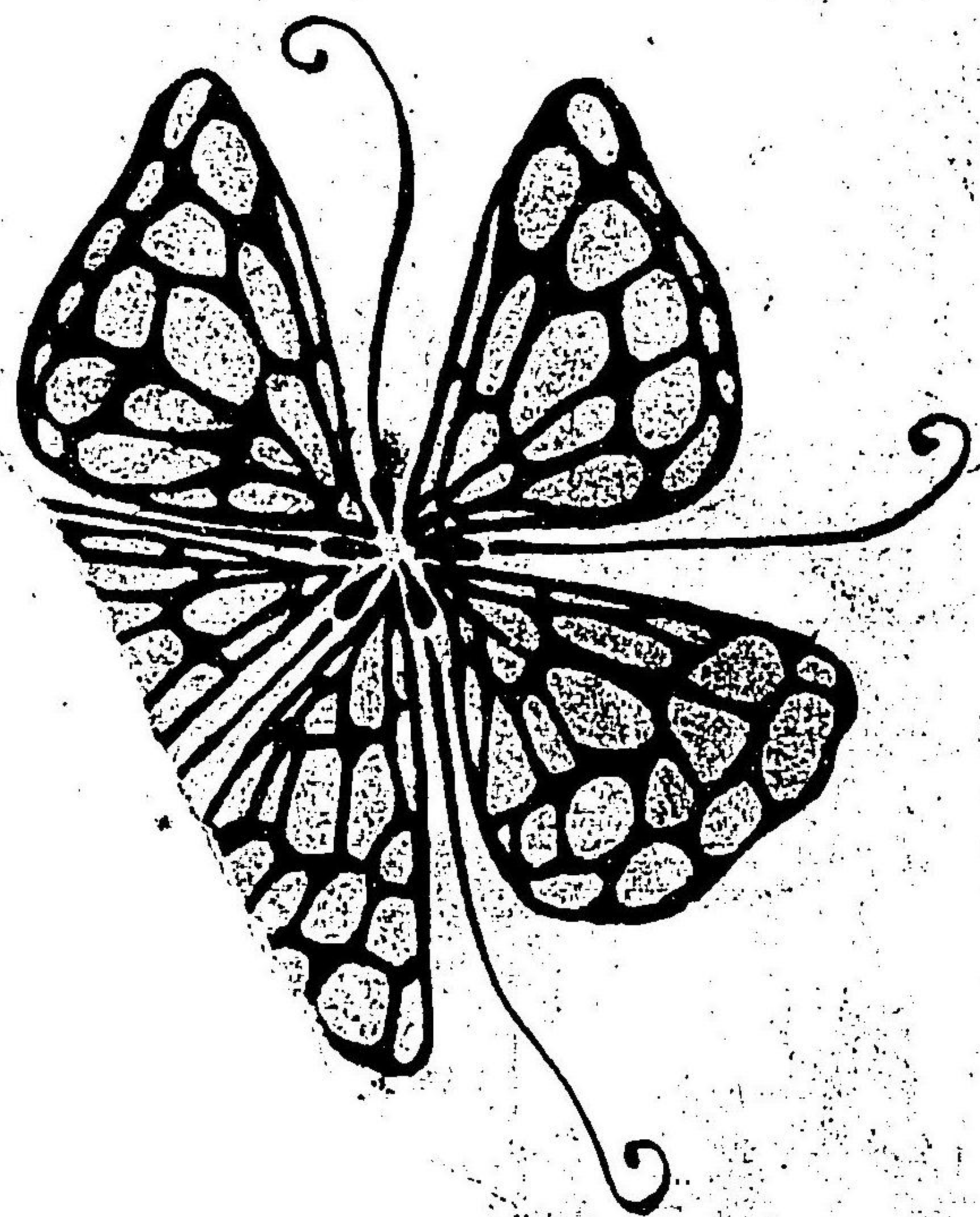
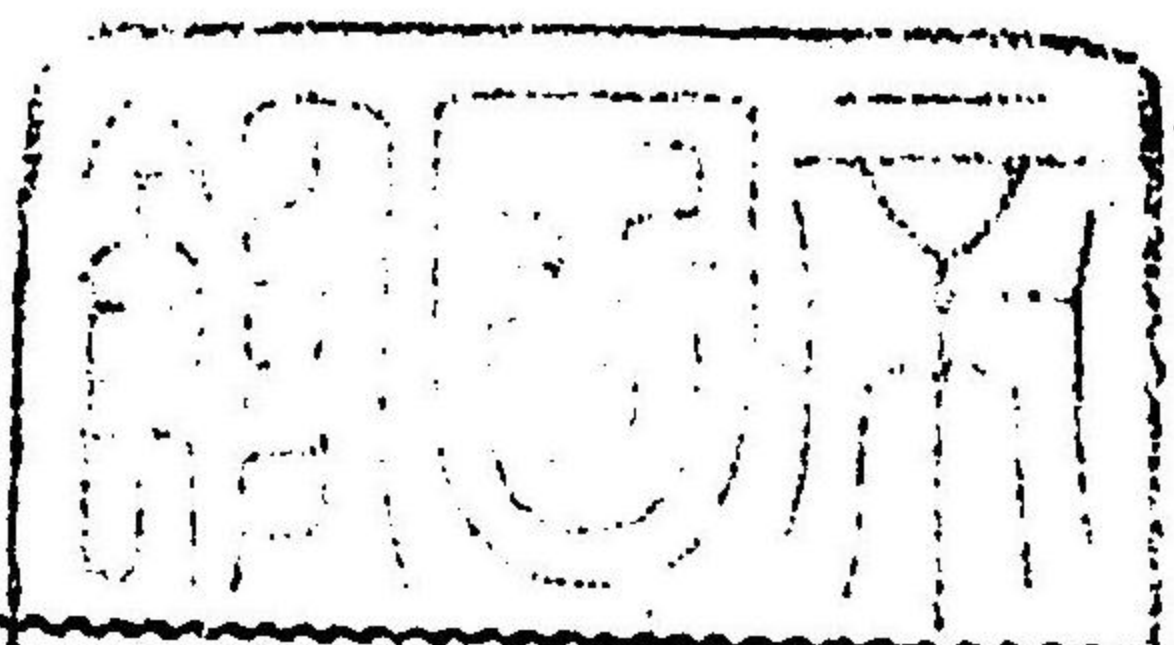


萬國女圖





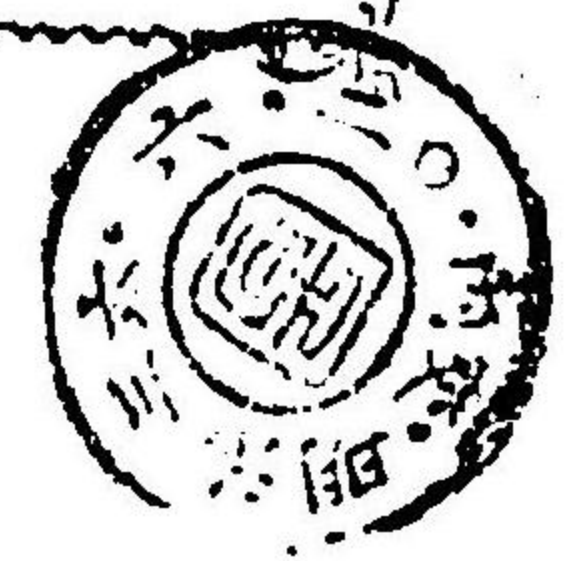


澁谷愛君は篤學の士なり。其の多年業務とせる師範、中學兩教員の職を棄て、遠く歐米各國に遊び、以て教育文學等の研鑽に資するあらんとす。君、得たるの數日前、一書を視めして曰く、是れ予が業餘記すところの書稿、題して萬國女子風俗といふものなりと。卷を開けば、豊頰曲眉の美人前に迎ひ、細腰皓齒の若俊に送り、巴里美人の艶麗なる、亞米利加少女の快活なる、日本婦人の淡雅なる、みな收めて一小冊子の中にあり、恰も世界百花の園に遊ひて、蝶鷲の歌舞するを見るに似たり。五月未日、東京を發程す。予送りて澁谷停車場より、品川停車場に至る、車中兩三の少女あり、別を惜みて漫に兒女の泣を爲さず、禮を守りて甚だ愜むが如し。蓋君平生教ふるころの女學生なり。容姿閑雅にして、頗る愛すべきものあるを見る。嗚呼君既に女子教育に於て經驗あり。而て是未だ歐米の地を踏まざるに、早く此著を出だす。用意の周到にして、才氣の超逸せるを知るべし。其の著は五年にして歸朝するの日は、造詣するべし。その著が女子教育界に貢獻する期し。

明治三十六年六月五日

國光社編輯局樓上に於て

水





本 日 那 支



度 印 ヤシルハ 加利米亞



西蘭佛 利吉英 逸 爾 牙 衛 葡



利 太 伊

亞 四 露



2 せれがが 1 すーだん 3 こなくり



4 ちるて 6 さほら 5 ぎれ 1



女 子 結 髮 十 種 樣 式



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



萬國女子風俗

目 録

著者のことわり……………一

第一章 亞細亞女子の容貌風俗……………四

一、日本女子其一……………四

二、日本女子其二……………八

三、支那女子……………三

四、安南女子……………五

五、暹羅女子……………七

六、印度女子……………九

七、ジャヴァ女子……………二



第二章

歐羅巴女子の容貌風俗

- 一、英國女子……………二八
- 二、佛國女子……………三三
- 三、獨逸國女子……………三五
- 四、匈牙利女子……………三七
- 五、露西亞女子……………三九
- 六、西班牙女子……………四二
- 七、葡萄牙女子……………四四
- 八、伊太利女子其一……………四七
- 九、伊太利女子其二……………四九
- 八、ベルシア女子……………三三
- 九、トルコ女子……………三五

第三章

亞米利加大洋洲、亞非利加女子の

容貌風俗

- 一、合衆國女子……………五二
- 二、加那太女子……………五四
- 三、殖民地女子……………五五
- 四、ハイチ女子……………五九
- 五、オセアニア女子……………六〇
- 六、埃及女子……………六二
- 七、アルジェリヤ女子……………六三
- 八、セネガル女子……………六五
- 九、スーダン女子……………六七

第四章

東京の舞踏

七〇



一、 舞蹈についで……………七〇

二、 神聖舞蹈(印度)……………七一

三、 ノーチニー舞蹈……………七三

四、 通俗舞蹈(ジャヴァ)……………七四

五、 唱歌(ネパール)……………七六

六、 日本の舞蹈……………七六

**第五章 西洋美容術**

一、 女子の化粧のしかたに付て……………七九

二、 奇妙な入浴法……………八〇

三、 顔の上の壁塗……………八二

四、 皺に就て……………八三

五、 毛を抜く……………八四

六、 顔の皮を新しくする……………八五

七、 痣に就て……………八六

八、 容易く實行の出来る秘事……………八七

九、 髪飾……………九一

一〇、 女子の結髪は一つの美術……………九四

一一、 齒の修繕、鼻の製造……………九七

一二、 身體を長く、又短くする……………九九

一三、 美術的歩みかた。座りかた……………九九

**第六章 (附録の二) 女の軍人**……………一〇一

**第七章 (附録の二) 東西の格言俚諺**……………一〇六

一、 日本……………一〇六

二、 支那……………一〇六



三、印度……………10  
 四、西洋……………10

附 錄

茶 受 談 語

(一) 於過去に 文壇瑣話……………13

○鐵腸居士の出版策○新聞切抜の手傳○假名垣魯文と娼妓  
 幻○風來編輯料を掏摸る○籃泉耳の垢を保存す○浪六の千  
 住通ひ○撫松の雜誌談○編輯局に吸子を置く○八犬傳の暗  
 誦○鐵腸博奕の事を木堂に問ふ○青萍と學海との衝突○總  
 生寬の落書○原稿紛失の分疏○淫書を歴史と誤認す

(二) 浮 世 模 樣……………15

○貸本の趨勢附たり猥褻本の事○理髮床の話○盜賊芝居○

歴代の流行唄○義太夫と學生○夜舗の糶賣商人○鐵道馬車  
 吟

(三) 昔 の 力 士……………14

○谷風棍之助○雷電爲右衛門○小野川喜三郎

(四) 藝 苑 茶 話……………14

○竹本綾翁○竹本東猿

(五) 平 民 的 文 學……………15

○狂句に就て古吟を評釋す

(六) 家 庭 雜 談……………16

○家庭格言○小兒の三十分間



萬國女子風俗

著者のことわり

澁谷馬頭著

○此書は世界各國の女子の、面相、服装、習慣、及び化粧法、結髪法等を記述した者だ。

○此書の記述の材料は、重に佛國人の著書から取り出した。特に日本女子に就ての記事は、二篇共に原書の意を取つて我意を差加へない。因て其記者の名を篇末に記した。

○日本女子の標本として挿入した肖像は、少し隠かならぬ感じをするので、再三考へて見た。併ら佛人が、日本の理想的の女子の容貌と見とめて掲げ出した者を、なまじい他者との差替へるのも本意でない。結



局やはりもとのまゝにして置いた。

◎更に多くの寫眞を挿入して、文明と面相との關係を、研究する材料に供したいと思つたけれども、其運びに至らなかつた。後日再版の期にでも至つたらと思つて居る。

◎諺と云ふ者は、其國其時代の思想を窺ふに、甚だ重寶なものだ。因て卷末に之を附記した。まかし日本の有ふれた者など、管々しくは書入れなす。

◎僅々たる此小冊子、はんの睡氣ざましであると云へば其通りだ。或は睡氣催しであるかも知れない。併ら其叙述した事柄は、地理歴史理化博物人類學等の、多方面に涉つて居る。強ち學者の参考にならないとも云はれない。亦我國女子が、我身の受けた批評を見ては、自ら省る所の標準を知り、各國の女子の風俗を見ては、其長所に倣ふ所の模範を、手

に入れられると云つてもよからう。各國の女子の風俗に、長所ばかりはない、短所も多くあると云ふ事は、勿論心得て讀ねばならぬ。





# 第一章 亞細亞女子の容貌風俗

## 一、日本女子 (其一)

◎日本婦人の眞直に垂れて居る衣服の上から見れば胸か腰か區別が付かない。軽い衣服は容赦なく大帯に締め付けられる。其の帯の兩端を留金なしに巻きつける。それで締りが足りなければ更に小さい帯を巻き付ける、奇麗な晴着の衣服は綿を入れた袋で縁を取っておく。其の縁はそれを大きく広げるため、そして其の姿を丁度コップを伏せて置いたやうな風にするのである。

◎足は内方に廻つて、地から離れずに歩なければならぬやうになつて居る。其のあゆみは巻物をはぐす如く、長い蛇の這ふ如く、曲つたり、くたつたりだ。

◎今一つ面白い事は、それも矢張立派にかざる積りであらう。帯の結目が重くるしい大きな瘤になつて、背負つて居るには、いゝ荷物だ。

◎衣服のやうにひどくはないが、其顔は日本人の美術的から道徳的から見た美人の顔はどんな者かと云ふと、長くて細くて目のまはりが平で最も可愛らしく見える所の者を理想として居る。眉は随分高く、併ら内氣で慎み深い調子の取れるのがよい。鼻は根もとが低くて、すこし下つて高くなるのがよい。唇は小さくて平たくて、そして赤いのがよい。頸は前へ少し傾いて、雁の首のやうになつて居るのがよい。髪の毛は御堂の漆のやうに、黒く光るのがよい。額は高く、上は狭くて、下の方になるに随つて、段々廣くなつて、恰も、白くて威嚴ある日本の三角塔富士山のやうな形をして居るのがよい。

◎そんな理想的の顔が、自然に出来て居る事は甚だ少い。そこで其出来



のわるい所を、化粧によりて、結髪によりて、繪具によりて、ピンツケ油によりて、うまく補ふのである。若い娘は、其生地の色を隠すために、白い土を厚く塗り付けるのは、あまり古風すぎる。我輩田舎に旅行して見た娘どもは、丸くて赤い顔をして居た。顔の白い娘どもに戯に近づいてからかつたら、顔の壁が少しはげて、中には赤く熟した林檎の實を見出した。

◎こんな體裁を以て美であると信じて、數百年此方日本婦女子は其體裁にはづれないやうに心がけて來た。其體裁にはづれては官府の御規則を破つたやうに、誠にすまない事と思つた。西洋婦人も化粧には随分注意して居るが其化粧のしかたは、相違して居る。若し高尚なる審美的の眼を以て日本婦人の體裁を批評すれば、彼の上半身はあまりに長い。彼の腰のまはりあまりに狭い。彼の足は殆ど曲つて居る。

◎上へは禮儀作法と云ふ漆で塗りかくして居るけれども其漆が剝げたら下には不羨な野暮な煩悶が出て來る。彼の袖は其の廣くて、大きくて、長い所の袖は、我等には飲込めない皇國風のクスクス笑ひとススリ泣きとを包むために使はれる。

◎其袖です。其地まで垂れ下つてる所の袖が、日本女子のためにどんな役目があるかと云ふと頗る奇妙。それは袋だ。翼だ。ポケットだ。防寒用腕ぬさだ。また旅行用カバンとして、何でもかんでもつめ込む。そればかりではない。腕を額の上にあげる時には、重寶な衝立となつて、若い娘は其の笑ひ顔を隠し年増のおかみさんは其の泣きつらさを隠す。

◎日本の詩人は袖と云ふ事に涙と云ふ道づれを添へて一つの意味を持たせる。思つた人と一緒に住まれない時には『長い袖の別れをする』と云ふ。此袖は樹の枝どの樹の枝にも引懸る。其の樹の枝とは彼をうまく取



なし、彼に思ひのたけを上手に傳へる所の男の腕である。輕卒にして秘密なる情愛の袖は日の暮れを待つてひつかゝる。(ペレンソル氏)

二、日本女子。(其二)

◎上野の鐘の音曉の霧を破り、日は東の空に差昇つて夜は全く明けても、菊子梅子などいふ美人は、なほ臥床の上に横はつて居る。されどもそれが安眠に耽るでもないのは我巴里の美人と同じである。臥床の上に打ち萎れ、疲せ細りたる腕はつむりの下にをり敷かれて、髪は額の上にもつれかゝつて居る。

◎裸體なる其上に、夜着る綿の入つたキモノを纏ひ、紐で結び付け、足には紅梅色の足袋をはき、粗末な木綿製の布團の上へ横はり、長時間其處に静止して動かない。それは其頭上の巧妙なる大建築——島田翁——の崩れるを恐れる爲である。彼の襟もとの、軽く持ち上げられたのは、

小さい枕に倚るためである。此の如き不便な體裁は、物を氣にする西洋婦人には、随分苦痛を感ずべき事である。

◎菊子は其眼を半ば開いてやがて再び之を閉ぢた。太陽の光線は壁に反射して輝いて居る。其處には白粉の外に何物もない、ターブルもなければ椅子もなければ、唯地盤に稻の莖で編んだ蓆を敷きつめてあるばかりである。而して其枕邊には雪の降れるかと疑はれるほどに白き紙が散らばつて居る。

◎菊子は漸く其惰眠から覺めて、床の中ながら笑聲の交つた所の朝の挨拶をすると、勝手の方から答への挨拶がある。是は菊子に其女中または其乳母が『お早う』を云ふのである。やがて風呂の湯が出来た事を知せると、菊子は徐ろ化粧の仕度に取かゝるのである。

◎菊子は起き出でた。小猫のをかしい運動と共に寢衣を着替へ、而して



其着物を取つて前に屈み、後の裾を曳きすりながら、急いで沐浴するた  
めに庭先きに下り立つた。左様。日本のムスメはプロニエーの野鳴のや  
うに、屋外に於て沐浴をする。アック氏はしばしば日本の公園の中に逍  
遙し、其状況を詳かにして、而して我輩に此詳説を惠まれたのである。  
乞ふ注意を持って讀み給へ。

◎彼の小さい家の圍ひの内の、煌々と朝日まばゆき所に立ち出で、菊子  
は其婀娜な身體を天空にさらけ出した。一の狭ぐるしい酒槽がそこにあ  
つて透き通つて清い湯がそれに充ちて居る。彼は其中に投入して蹴り、  
ちつと靜つて身動もしない。温度は七十度の熱さを保つて、鶏の卵を煮  
固められるであらう。彼は之を恐る氣色なく其鹿爪らしい顔は、我が巴  
里の小主婦そのまゝだ。彼は苦みの聲を發し、又疲勞の様子をあらはす事  
はなし。

◎或る時間を經過して菊子は槽の中からあがつた。湯氣はポツポと彼の  
身邊から立ちのぼる。琥珀色である彼の身體は眞紅色となつた。彼の忠  
實なる女中は、細い綿布を以て武装——たすき——して掌を押しあて、  
其主人を塗つた。擦つた。飯粒——恐くはぬか袋だらう——を入れてあ  
る袋の半ダースを費した。飯粒は其堪忍強い人の皮膚にすりつぶされな  
ければならぬ。飯粒は湯氣の爲めに柔かになつて粘質油を滲出し、湯傷  
の痛みを鎮靜し、且つ其皮膚を優にし美ならしめるのである。新入浴法、  
新揉療治法、新化粧術は此の如くして成功するのである。

◎菊子は赤フランネルの短き腰巻を纏うたまゝ、庭先の樹木を眺めやり、  
泉水に泳ぐ所の鯉鮒を眺めやつて、腰白小僧の、なき見る事を憂へずに、  
悠々として圍ひのまはりを過ぎて内に入つた。彼は我等の如く『恥かし』  
と思ふ觀念は持たない。



◎併しながら彼にキモノを持つて行つて着せて御覽、彼は袖口を人形のやうに揃へ肩の襟を廣げて、胸から乳にかけて帯を半圓形に締める。見よ彼の絹織物を以て身體を埋められ、艶美なる装餅を着け、香水をにははせ、照り輝いて居る時は、さながら春の花である。彼は華客或は「ダナ」の來つて、高價の賜品のある事を待つて居る。而して彼は無限の深意を含める微笑を以て之を招くのである。(ブリッソン氏)

◎著者云ふ。此ブリッソン氏の日本女子の批評は前のベレッソル氏の比較するに、甚だ苛酷な云ひかたである。我國の一般の婦人に加へた所の批評であるとするれば、到底承知する譯にはまゐらぬ。併ら或る一部の女子は、これにあつて居る者もないとも云はれない。因て之を掲載した。

三、支那女子

◎支那の女子は外出する事がない。内に居ても部屋の奥に仕舞はれて、男子と同席する事がない。夫婦づれの招待の時にも、夫と夫と席に就いて、細君同士は別室の中で應對する。何でも他人が近づかないやうにするは、新支那人が其妻に對する最悪の流儀である。

◎禮儀作法として支那人に對して、こんな挨拶をしてはならぬ。即ち「奥さんは如何です」など云つてはわるい。「御家族は……」といふ工合に遁げことを用ゐなければならぬ。貴族或は富家の婦人で稀には公然と外出する者を見ることがあるが、買物に店に立寄る事もなければ芝居見物に入る事もない。

◎併し人の注目を引く所の小娘どもは異様な風をして店の圍ひの中に集つて何やら話しあつて居る。或は店先に立ち止つて或は甚だしきは坂を登る車の間に立ち止まつて、締めて居る所の帯を見せびらかして居る。



◎遊覽場に行つて見ると實に面白い。都會の娘も田舎の娘も内地の娘も海邊の娘も北方の娘も南方の娘も悉皆一度に見る事が出来る。カントン娘は足を小さくして髪を染めて居る。そして瘦せ細つてすらりとして居る。天津娘は丈の高い事は一番だ。そして髪は無造作な結び方で其後方にふさを下げ鳥の羽を付ける。滿州娘は胸の所を廣げて髪を一本の辨の上に巻き附けて腦天の上にチョンと載せて置く。

◎すべて髪は眼鏡の鼻おさへの様な形に作つて飾紐を結び、鬚鬚の所に作花を付け額の所に箔紙の葉がかゝるやうにして居る。髪飾と耳や頸にかける玉とはやたらに珍重する。

◎勿論よく見せる積りで餘り飾り立てる所から、頭の大さは、本願寺の屋根見たやうに廣がつて、誠に立派でござると、拜み申す外はない。又種々の白粉や紅などは繪具で厚化粧された顔のねばつくのは氣持よくも

あるまい。そして又其厚化粧のために、顔の輪廓がわからなくなつて、人は、どこからが頬で、どこからが襟もとか、迷ふのである。

四、安南女子

◎三母后。御一人はチユー、チエツクの母后で八十七歳。御一人はチユー、チエツクの寡婦で七十歳。御一人は現時の國王の母后で四十歳。

◎三母后共に只今は御隠居の御身で、佛像のやうに一間に安置され、崇め尊ばれて御過しになつて居る。國王御自身に、母后がたの御前に御出になる時は、いつも素足である。履ものをゆるされない。又何か申し上げる時は、いつも膝を突いて申しあげる。母后がたは、絹の幕の奥に、非常に高い椅子の上に坐して居られる。

◎五日目毎に『ライ』と云ふ拜謁の儀式がある。國王は母后がたの坐敷の中に入つて幕の外にひざまづいて申上げる。極低い聲で只一言、『コー



「と申し上げる。これは『息子でござります』と云ふ意味である。すると御老體の母后の御命令によつて、幕がそろく揚がる。國王は直ぐに平伏して、御頭を地べたへ附けて、九たび禮拜する。其うちに幕がさがる。國王の御目に、母后がたの御姿が明かに見とめられない。これが即ち『ライ』の儀式である。

◎『ライ』がすむと國王は御退出になつて、次の間の柱のもとにひざまづいて、御命令か、御叱りか、下るのを待つて居られる。母后がたの御叱りとしては、其侍女に、盆の上に鞭を載せて、國王の御前へ差出させるのである。日本で云へば、白木の三寶に、白鞘と云ふやうな鹽梅である。或時しかも唯一度、憐むべき國王は『むすこでござります』と云ふ事を忘れなされた。所が母后が大立腹で、鞭を取つて地に投げ附けて、『國王を打つのではない』と怒鳴りなされた。

五、暹羅女子

◎暹羅の宮中で、最も愉快な慰み者は、芝居である。其芝居は、神佛の功德靈驗、諸王、諸英雄、諸仙人の事跡、百姓の騒動、盜賊の跋扈等と藝題にする。たまには、歌の合唱、或は管絃の合奏で調子を取つて、無言の身ぶりで現す所の、ドラマを演ずる事もあつた。見物の客は、小供の爲めにする人形芝居より、二倍の入がある。

◎貴夫人の平生の娛樂は、公園に出て花を摘み取る。飼鳥や泉水の鯉鮒(?)などを世話する。其子どもの髪に挿す花飾りを編む。花束をつくる。歌を歌ふ。琴の音に合わせて踊る。赤坊を抱いて散歩する。特に好んで入浴する。又公園の清い池の中に入つて泳ぐ。

◎將棋、骨牌、双六、支那骨牌等は、其侍者の男女と共に翫んで、日を暮す材料にする。又支那人から傳へられた博奕が、婦人社會にまきりに



流行して、ずるぶん大きな勝負などもあるそうだ。一體勝負事を好む精神は、其人をして終に悪風に陥らしめる。或婦人などは、自分の所有品でないものを、費消したり、賣拂つたりするさうだ。日本婦人もお氣をつけなさい。

◎暹羅の女子は、他の東洋女子のやうに、其近親の者の集會のほかは、外人の招待などに應じて、出かける事がない。身體の大小風采等、外人の中へ交つて、耻かしうまいやうなものは、時として出かけない事もある。

◎男女とも、短い上衣のビニショールと云ふ者を着て居る。下の方には、又短い下着を着て居る。或婦人は、絹の大帯を纏ふ事がある。胸の周圍に巻きつけて、浮いた髪を附けて、足もとまで長くさげる。

◎婦人兵と云つてある。婦人兵は常に室内の役務に服して居る。そして

大儀式には、其裝飾として、婦人兵の一隊をそなへるのである。

六、印度女子

◎印度の美人は、毎度芝居で我輩の御馴染である。其實撲で飾りない姿は、實に印度美の觀念を我々に與へる。彼國詩人の歌ふ所を聞けば、巧みなるたとへを借りて遺憾なく其眞面目をあらはして居る。

一、神のおむすめ、印度の娘

印度むすめの其やさ姿

二、黒い髪の毛、孔雀の羽の、

垂れて下つて、膝までかゝる。

三、細い眉毛は、あの山もとに、

虹がちらりと、立つ夕げしき。

四、光る瞳は、君待つよひの、



關を破つて、かゝやく星か。

五、高い其鼻、野山の鷹の、

嘴に似たとは、譽やうが足らぬ。

左様さ。真直で立派でこそ、鼻と云ふやつは、よいのではないか。

六、赤い唇、珊瑚の玉の、

つやにまざると、誰見て云はぬ。

七、白い其齒は、こまかに並び、

庭の素馨の、花とも見える。

八、丸いかひなに、まがつた足に、

たち居ふるまひ、身軽なからだ。

最後に何と云つてあるか。

九、これがけだかい、またしほらし。

印度むすめの、其やさすがた。

十、神のおむすめ、印度の娘。

印度娘の、其やさすがた。

七、ジャヴァ女子

◎ジャヴァの素足の尼美人の舞蹈ほど面白い者はあるまい。洞穴の中の響のやうに、ゴロンゴロンする、鉦や、ルバブなど云ふ奇異なる音楽の合奏の間に、ジャヴァ美人は立ち現はれて、まづ一と挨拶をする。其容貌は非常に愛嬌がある。それから悠々として床板を足のうらで擦りつゝ前へ進む。暫くして後方へ歩む。暫くして丸く廻轉する。青い寶石を飾つた腕飾にまかれてある兩手を、休みなしに振り廻して居る。すべて重く重く緩くりしたふるまひである。

◎人は此マレー女子の小さい身體の踊りによつて亞細亞舞蹈の美味を感



するのである。

八、ベルシヤ女子

◎國王の遊獵の時に、后たちは、其おともをして行く。途中で不意に、どんな事が起つても、非常な忍耐力を以て、辛抱をしないとせず、宮中から出る時は、丁寧に圍はれた車に乗つて、市街を通り、野外に出てから馬に跨つて行く。袴は宮中以外に着用する者をはく。馬に乗るには兩足を同じ側に揃へず、双方へまたがるのである。出来るだけの長途をさせられる。時として、夜明に起き出で、衣服を着替へ、帯をしめ直し、馬に乗り出す用意をする。五時間六時間の間續けて走らせられたり、又は夜中までかけて、食事をさせられぬ事がある。こぼしたり、苦い顔したりする事が出来ない。それは寵愛を失ふものとゐとなる。

◎國王は最も快活な后を愛せられて、そなたへ向いては、常に満足な

る笑顔を示される。其愛されて居る后へ他の后たちは賄賂を差上げねばならぬ。后たちは絶對、屈從を甘じなければならぬ。后たちの中に正當の皇后と云ふ號を附けられるものはない。皆同じ資格の後だ。數多の后たちの中に國王が其名を知らない者いくらもある。

◎強壯なる、勇武なる、騎馬の美人が、さすがに世人の譏の矢には、ひとともせぬベルシヤ國王の、獵場に立たせる前後左右に、侍つて居る有様は、如何に美々しい者だらうと思ひやられる。然るに國王も、近年大に感ずる所があらせられたと見えて、數百人の后たちの中で、僅に十五人だけ、最も年の若い見目のよい者を、宮中に留め置かれて、他は皆里へかへしてしまつたのである。國王はすべての腹に、女兒を數へて、ただ七人の子供を持って居られる。

◎遊獵に就て、后たちの最も希望する所は、早く歸るにあるのだ。后た



ちの平生の慰みは、顔の化粧をすること、衣服を飾ること、美味を味ふる事、茶或はシャンペーニ酒を飲みつゝ俗曲を聴く事などだ。今一つある。后同士の、顔や衣服の棚卸をしあふ事を好んで居るのだ。

◎若いのも、年とつたのも、國王の御伴の外は、一切宮中から出る事を許されない。たゞ父母を見舞たいと云つただけでは、出る事を許されない。

◎大臣或は公使の夫人は年に一度は國王の愛后及びヴァリヤの母を訪問しなければならぬ。

◎報酬として后たちは、受負人の妻或は歐羅巴商人の妻によつて、金銭を食ふ事がある。其周旋によつて物品を賣捌いたり、又は其計畫が都合よく連なりするからである。併、ら宮中に入出するためには歐羅巴婦人もベルシヤ風の服装してなければならぬ。此御話は何だか銀座通の或る煙草商會の内幕を聞くやうな心地がする。

九、トルコ女子

◎古代の純粹のオットマン女子の美は、土耳其の國はアナトリー地方だけにしか、今日は見とめる事が出来ないが、我輩の目から見れば艶美を缺いで居る。愛嬌を缺いて居る。人情を動かす力を缺いて居る。顔は丸く、幅廣く、或は半卵形をなして居る。目は弓なりの眉に縁とられて居る。鼻は大きくて、稍、鷺の嘴の形をなして居る稀には丸くて目立たぬのもある。口は唇の所できつく締つて居る。

◎今日のトルコ女子は、オットマン人の美に、シルカツジー人、シヨルジャ人、ギリシヤ人の粹を加へた雜種の女子なれば、どんなに奇麗であらうかと思はれるが、左様ではないやうだ。

◎トルコ女子の容貌に一定の評を下すことの、甚だ困難であると云ふ事



は、皆人の承知の通りだ。其容貌は種々と區別があつて、各其特別のしるしを現はして居るが髪は褐色、淡褐色が多い、暗褐色は多く見えない、目は大抵黒く、碧眼はまれである。そこでトルコ女子には美人と云ふ者が多くないのであるかと云ふと是また甚だ答へるに困難である。トルコ女子をあまり譽め過ぎた事を白状し、且つコンスタンチノブルに醜婦大集會を開くことを計畫したラマルチヌの靈前に對して其機嫌をそこなはぬやうに答へるのがむづかしいのである。併し有體に云へば、儘にコンスタンチノブルに於ては、倫敦の有名なるゼ、アグリ、クラブ（醜男女俱樂部）と、思ひ切つた標札をかけて置く所へ、滞なく、入會出来る資格のある者はいくらもある。

◎トルコ女子に於て缺けて居る所は、やはり艶美である。愛嬌である。顔のしまりである。目鼻の釣合ひである。其柔和な所と風雅な所とを見

れば、たしかにオットマン人種中の優等者ではあるが、併ら一般に精力が乏しい。起居ふるまひが緩漫で遅鈍である。たとへば其國に製造する蒸餅のやうなものだ。少し粗製だ。少し味が足りない。鹽か胡椒がポツチリ欲しい。

◎遅鈍緩漫は歩行の時に一番に目に立つのだ。何事をするにも、是ではかどるまい。トルコ人の半数なる女子の、こんな肥満した結果は憂ふべき者だ。





第二章 歐羅巴女子の容貌風俗

一、英國女子

◎或る肖像畫に心得ある交際家が、英國女子の化粧する有様を、決闘場の柵内の光景に見立て、「種々の繪具と云ふ敵手に出合して、決闘に従事するのだ」と云つた。此面白い譬喩はよく適合して居る、倫敦及び地方の妙齡の女子の服装と外貌とに、此譬喩をわてゝ見ると實に妙だ。併ら段々英國の上流社會の嗜好と風俗とは頗る變化して來て、華美虚飾を競ふ時勢とはなつて來た、種々の衣服を着飾り、時には佛國女子も及びかぬる驕奢をつくす。そののみならず其化粧する人を、わざ／＼巴里から雇うて行く。

◎英國女子の容貌は時々佛國人のボンチ繪の材料になる又佛國の芝居の

舞臺の上では、英國女子を齒が長いと云つて嘲笑ひ、髪のかきやうがビール瓶の口抜きさのやうな形だと嘲笑ひ、頬の色が血の滴るロースピートの肉のやうだと嘲笑ひ、足は平たくて長くて、水雷艇のやうだと嘲笑ふのである。其不釣合なる滑稽なる容貌に就て佛國人に今日まで與へられた所の輕蔑を拭ひ去る事は中々容易であるまい。

◎とにかく倫敦に永年往來して、依姑最負のない佛國人の眼に見せるに、アスコットの競馬に於ても、ヘンリーの競漕に於ても、ガーデン、パーティーに於ても、劇場に於ても、夜會に於ても、シーゾンの晩餐會に於ても、宮中の大宴會に於ても、英國女子は其中心となつては居ない。唯重寶なものに見える。贅澤なものに見える。見えを繕ふ者に見える。

◎純粹の英國女子が、終に其孫の亞米利加風に、化してしまはなければよいが。



◎一少女、急ぐともなしに街路のへりを傳うて行く。其頭の頂から其肩先から其細腕まで、全體鼠色の肩掛のやうな者に包まれて居る。人は其鼠色の縁を取つた顔だけしか見る事が出来ない。手は毛糸の編物で包んで置くが、足は裸である。併し其足も手も細くて青白い。顔は愛嬌があつて案外に奇麗だ。年中絶間のない濕氣のために、常に顔色がよくなつて居るとして、或る巴里兒が羨んだ事がある。目は晴れた空の色のやうに氣持のよい緑色をして居る。皮膚は青みが、つて、薄くて、接吻されたら痛みを覺えるだらうと見える。

◎一少女、悠々として迫らず。石炭置場の周圍に、灌木茂れる野原の末に、唯一人で徘徊して居る。又壁と搏風としか残つて居ないあばら屋の前を通つて、寂いとも怖いとも思ふ様子がない。それも其筈、少い時が

ら墓所のやうな場所に育つて来たものだ。突然に黒い服を着て、丸い縁取帽子を横丁に着けて、道の真中を歩いて来る二人の大男に出合す。少女はそれに丁寧な會釋をなして、普通の歩みかたで、歩みをついける。空にかゝる白雲か野に茂る灌木としか見ない。憎らしい程落着いた度胸だ。これはこれ愛蘭處女の狀態。

二、佛國女子

◎佛蘭西女子の説明は随分入り組んで居る。佛蘭西其物が色々の區域わゆる如く、女子に就ても種々の容貌と風習とある。北方に行くと雪のふる寒國があるかと思へば南方に於ては炎熱堪へがたい所もある。それと同じく女子の眼の色に付ても或は鼠色のもあれば或は茶色のもあれば或は青色のもあれば或は水晶の玉のやうに透通るのもある。

◎家の中に閉ぢ籠つて居ては分らう筈がないが一寸旅行する時には其地



方の女子の容貌風習の相違が頗る目に留まるわけである。中部地方から、  
セーヌ地方へ街路を眺めて通ると女子が家の入口にぞんたり又は遊んで  
居る子どもを見守つて門前まで驅け出す事などもある。ロアー地方か  
らアール、アヴィニヨンの方へ向つて行つた時に晝の休みであつた、或  
る家の奇麗な娘が庭前へ出て来て葡萄棚の蔓の上にあふむきに寝て、心  
地よささうに身を揺り動かして居つた。齒をむき出して、髪をもつれさ  
して。

◎佛蘭西女子と云へば一つのやうだが、一つではない。儘に一つ種子か  
ら出た姉妹ではない。やうやく辛うじて従姉妹位の所だ。各地方の女子  
の氣質に色々様々あることは驚くべきものだ。最も甚しい相違はツ  
レンヌ女子とマルセイユ女子とであらう。ツレンヌ女子は飽まで貞淑  
を主として居るに引かへて、マルセイユ女子は、お侠で、お茶七でお轉

婆で通つて来た。又アール女子は信心深くて愛嬌がある。ローレヌ女子  
は皮膚が紅梅色で、腹には大望を抱いて居ながら衣服飲食は極めて儉約を  
守つて居る。ブルタニウ女子は海邊の潮風に焼かれて茶褐な顔色をして  
居るけれども金錢を貪らず、勞働を厭はず、詞數多からず、そして活潑  
な氣象を持つて居る。

◎巴里女子は各地方の佛蘭西女子の氣質を取り集めて其粹を抜き取つた  
者である。巴里女子は家政を取締る事を知つて居る。一つの家庭の有様  
は一つの親族間に及ぼされる。かよわい女の腕一本で、其一家は和樂の  
氣満ちて居る。獨逸女子のやうに其文學と裝飾との風流を棄て、全く  
事務取扱所の隅で月日を送るやうな没趣味の生活はしない。

◎風流とか雅致とか云ふのは全體佛蘭西人通有の氣質だ。最も古い國民  
としては無ければならぬが佛蘭西人は先天的に此の成熟したる趣味に富



んで居る。そうして巴里女子の體度裝飾は、實に勤勉なる蜜蜂の如く、窠窠たる胡蝶の如く世界の一美觀として數へられて居る。

◎併し巴里女子の裝飾に心を込める事は、其度に過ぎて、時としてはそれが爲めに正理も顧られない場合があるやうだ。しかしながら永く保ちたる熱情も、時間と云ふ解熱劑のために漸く中正に立ち返つて、さて多數の家族の世話に身をやつし或は纖弱い風ではやり切れぬ職業に、みつしり心を入れるやうになる。

◎巴里女子は、今は佛蘭西女子の標本になつて居る。小説家に云はせると色々巧妙な形容をするが簡短に説明すれば、斯うだ。黄金色、縮れ髪が額に巻きさがつて、目と眉との間にひだが有つて、全體くせのない顔をして居る。手は肘まで手袋をはめておく。手袋を取れば透き通るやうな手が出る。

◎大抵巴里女子は、夜分は交際場裡の花役者で、朝になると、幕所の下女で、世話女房は毎日の役目である事をのみこんで居る。子どもに髪を結うてやる、花瓶の中へ花を挿す。事によると小刀を持つて箱細工もしないではない。窠窠たる盛粧の美人となる前には、貧乏者を見舞つたり、病み臥して居る父の傍に小説を読んで聞せたり、子どもに宗教の事を教へたり、友達への無沙汰の手紙を書いたり、役所へ出す届書などを書いたりする。此の有様を日本の令嬢たちに見せたい。

三、獨澳國女子

◎ウインヌ女子は以前にムンカジの有名な額面について其繪姿を見たことがある。ウインヌ女子は極質素な異様な服装はして居るけれども、愛らしくないでもない。勿論巴里女子のやうには行かないがウインヌも都だから、奇麗に見えるわけだ。



◎併しウインヌ女子が窈窕たる美人とならうと思つたらこれは断念した方がよい。

◎次に獨逸女子は、ゲーテのシャロットに似たとすれば頗る妖艶なやうであるが、それよりは、寧ろ内氣で、萬事控目にする氣味がある。獨逸女子は落着いて居る。温和である。そして不思議に無味平淡を利用する事を知つて居る。ウインヌ女子はきつい心を持つて居る。容易に情を動かさない。しかし粧飾と云ふ點について、氣の付く事は頗る敏捷ではある、獨逸女子は滋養スープであれば、ウインヌ女子は蝦のフライだ。

◎ウインヌの中等以下の社會では面白い事をして遊ぶ。廣漠たる野原に繰り出してそこには木馬もあれば射的場もあれば舟に乗る所もあればロシヤの山もあれば芝居小屋もあれば咖啡店もあれば何でも遊散の仕掛は

備つて居る。或る位置を取つて管絃の合奏が始る。樂手は皆身分ある婦人のやうな白服を着けて居る。毎日ワルス等の曲を初から終まで演奏する。聴衆は役所からの命令でもあつたかの如く寄つて来る。

◎よい時節の時には毎日午後になると市民は、其全家族を提げて来て、『田舎ふるまひ』をする事がある。皆々芝原の上に坐つて、或は歌ひ或は踊り、或は奇妙奇天烈な音樂の合奏をやる。夕方になれば幾萬の人々、男も女も、小供も年寄りも、學生も女學生も皆手と手と組み合せて市街をさしてかへるのである。

◎此多人數が割合にあまり混雜しないのは、其遊びかたが極靜であるからだ。併から此靜であると云ふ事は市民がふざぎ性で、快活な氣象に乏しいと云ふ事をあらはすのであると云はねばならぬ。

四、匈牙利女子



◎匈牙利に行つて見て、先づ目につくは盛粧して薔薇の花簪をさした美人の姿だ。抜け出た者もないけれども、あまりまづい者もない。大抵快活で、風雅で、一般に似合しい服装をして居る。日の暮がたに車馬の往來打絶えて、いと静な道のはとりに、美人の優悠として散歩する有様は、宛然たる一幅の好畫。

◎多くの女子の中に素性の遠ふ者もなく、又友達を悪い道へ引き入れる者もない。そして又門閥を鼻にかけて威張るやうな者もまたない。唯寶石と化粧とで輝いて居る猶太教の相續者ばかりである。

◎コルソの式の濟んだ後に、匈牙利女子は咖啡店に入り、或はビヤールホールに入る。そして布を裂くやうなヴィオロンの音や、猫の鳴くやうな胡弓の音を聞いて楽しむ。又軍隊の勇ましい合奏をも聞くことを喜んで居る。其間にビールや葡萄酒やいろ／＼の酒を飲みはじめ。バブリカ料理の

シチウも注文する。まことに陽氣を騒ぎをする。なるべく家へ歸る事の遅くなるやうにする。

五、露西亞女子

◎ロシア女子は、或小説家の著述『褐髮碧眼の婦人』によつて我輩の知己となつた。そこでロシア女子とさけば直に、頭が平たくて髪が短くて縁取つた小帽子を冠つて、小僧のやうな風をして居る女子を心の中に浮べる。併らこれは特別なロシア女子であつて一般のロシア女子は即ち子々孫々相傳へ来て、時代々々に變遷して来て、今日の風を形づくつたロシア女子はそれとは違つて居る。次に叙べる所の小女は、どんな氣質風采を持つて居るかに注意してもらひたい。

◎『薄命の美人』ナタリー嬢は。各國の女子の特質を一身にあつめて居る。英國女子に似て、柔和であつて併ら操を堅く守つて居る。和蘭女子



に似て、精神が落着て居る。佛國女子に似て、妖艶にして人に愛せられる事を喜んで居る。此等の美質を具へて居て、尙ほ此他にスラーヴ種族固有の、二大欠點を具へて居る。其一は奇矯なる小説的氣質だ。其一は巻煙草を吸ふ習慣だ。彼は小説的愛情によりて或は可憐なる青年詩人と偕老の契を結ぶ事を望み、或は蕭洒たる貴公子に一身を托する事を望み或は愛に沈める人と其愛を借にする事を望み、或は献身的の傳道者を慰める事を望む。其母たる人は、娘の迷ひを覺まし眞正の道に、方向を取らしめる事に注意する。巻煙草を吸ふ習慣に就ては、とても矯正する事が出来なくて、相かはらず煙を噴き出すは、まるで瀧關車の煙突のやうだ。

◎ロシア政府は、工場に於て職工が喫煙する所の無作法を、何とも見とがめない。小供の悪風を直すには或は熊が來たと云ひ、或はおまはりや

んが來たと云つて怖がらせる。また椰子の樹も、護謨の樹も、カメリヤの樹も、暖室の仕掛によつては、ニースの公園に移し植ゑられる。喫煙の習慣は矯正し得ないかしら。

◎食事の始まる一寸前に、若い娘は簡單なる服装で食堂に出て來て、微笑を湛へて窓の轉を漏らす。誠に可愛らしい。両親が出て來る。和氣洋々室内に滿つる、子供等は其父親の手に、母親の手に、叔父叔母の手に、老いたる祖父祖母の手に、ロシアの家族には、必ず揃つて居る人々の手に接吻する。食事は親愛を以て過される。若もナタリー嬢が居るならば、ルービンスタインの即吟を奏して、其褒美としてイタリヤの課程に就く前に、櫓に乗つて遊んで來たいと願ふであらう。又ヴァアは茶色の肩掛をかけて、小さな聖母の肖像のやうな姿して、友だちと散歩に出かける約束した事を、靜に云ひ出すであらう、其時父母は情愛深い笑



顔をつくり叔母は少し小首を傾けて、『若い娘と云ふ者は、そんな騒  
をする者でない』とひねくるであらう。

六、西班牙女子

イ、三美人

◎エレナ嬢へピタ嬢、アデリナ嬢、三美揃ひの嬢たちは、各々三種の頭巾  
を携へて居る。其頭巾は、暗色或は褐色の髪の上を覆には此上なし  
の品だ。一つを黒頭巾と云ひ一つを白頭巾と云ひ一をマドロノと云ふ。  
マドロノとは楊梅の實の事で、其頭巾の上にある飾が、其實に似て居る  
から其名をつけたのである。

◎エレナ嬢は緑の袴を着て出て、小娘共を相手にして六絃琴を奏し唱歌  
をうたふ。嬢が歌ふ間もなく其愛嬌ある顔をは、何か物思ひに沈んだ風  
にするのは得意のわざとして人々の感を引くのだ。

◎エレナ嬢が六絃琴に調子あはせて唱歌をする間に、ピタ嬢は緑及び  
黒の装束で、アデリナ嬢は美麗此上なしの精巧なる褐色の衣、黄色の絹  
の袴の立で、二人揃つて踊る。木魚のやうなカスタニエツトと云ふ物  
を叩いて踊の足柏子をとる。御客は續けて柏手喝采する。段々に樂器の  
音、喝采の聲相和して、勢が迫つて来る。

◎二人の踊兒の足踏、身振、目のつかひやう、共に敏捷にしてたくみで  
ある。二人は寄り添ひからみつく。次にはぐれて遠ざかる。次に再び寄  
り添ふ。頭を逆に下にむける。愛情溢れた目つきを見せる。次に又離れ  
て片足を前に伸し、身を弓形に曲げる。最後にカスタニエツトの一鼓を  
合圖に、大氣取に氣取て踊をやめて第二の踊を待つて居る。これがアン  
ダルースの最も面白い見物である。

ロ、シタニウ踊兒。



◎ジタニツとは西班牙人がボヘミアの踊兒を呼ぶ名である。其踊兒は、音頭取の合圖によつて男女相携へて、立上り、規律正しく歌ひ且踊る。其踊は面白い者で、或は護衛兵の進行の真似をする。或は婚禮の儀式をする。或は愛情發表のしかたをする。唱歌は非常に高く叫ぶので、其興味を感じるに至らないが、見物として面白く不思議な事は、マドリツドの咖啡店の中に奏する、セフイヤ人の踊に百倍する。

◎ジタニツ踊兒は他人の真似する事の出来ない技倆がある。一人は奸悪で、一人は善良な、二人の貴族の事柄を踊る事がある。此踊程善惡の特別の性質をよくあらはす者は他にあらまいと思はれる。一人は男子、一人は女で、同じ風をして居る。二人寄りつ離れついろくするけれども決して二人の腰のあたりを近接ける事がない。其態度、足つき、手つき、口つきで、始終問ひつ答へつして居る。六絃

琴及び琵琶は瘦がれて泣くやうな音を出して居る。鈴付き太鼓はどんどん鳴り響く。側に見て居るすべてのジタニツどもは、鋭い聲で掛聲して、踊にふしをつける。オレー、オレー、と連呼する。或は『子を持つ母萬歳』或は『君よ、君よ、此美なるアンカルナシオンを見よ』などの意味を連呼する。外人の耳には何の事やらわからないけれども、まはりの人々にさそはれて自然同じく連呼する。

七、葡萄牙女子

◎元來西班牙人は阿非利加人に近い。葡萄牙人は亞粒比亞人に近い。殊に葡萄牙人の中でリスボン人が最も亞細亞風だ。しかし東西兩種混合の結果は、愛嬌あつて、しかも沈着なる今日のルジタニヤ美人を作り出した。

◎ルジタニヤ美人即ち葡萄牙女子はすべて目もとに愛嬌がある。しかし



中にも都會の婦人よりもアラビヤ種とジエデヤ種の混じた所の田舎の女子に於て最も可愛らしきを見るやうだ。十六世紀の終りリスボンに駐在した所の伊太利大使が葡萄牙女子に對して下した所の批評が面白い。彼れ葡萄牙女子は美麗でそして目鼻の釣合がよく出來て居る。其髪は天然に眞黒だ。たまには褐色のものもある。其顔付は重々しくて愛らしう。其目は黒くて光つて其顔をして一層の美を添へしめる。』と云つた。

◎葡萄牙に於て今日はすべての女子は田舎ものではなくて、巴里風の装束をして居る。以前はカポトと云ふ毛皮の上衣を着た。そしてランソと云ふ糊を強くつけた白の覆面をかぶつた者だ。すべて女子は重くるしい大外套を着て外出した。肩を少しうしろへ引いて、上衣の襷を立派に保たせるやうにした。覆面は軽く髪の上からかぶつて、日にあたる顔を白い軽いかげにかくして保護した。

◎葡萄牙女子は寶石崇拜者である。其足は甚だ奇麗な者だ。或は素足で居る。或は見事な脚半のやうな物もはいて居る。

◎葡萄牙の田舎女子の好がちやんと三色に限つて居るのが可笑しい。北部地方では赤又は黄色、南では緑色を珍重する。

八、伊太利女子。 其一

◎『スクオラ』と云ふ女工場はローマの市街にもある。プラノの港にもある。其内部は尼寺のやうに静つて居て、廣い室には石を敷きつめて、石灰を塗つて白くした壁の上には、マルゲリット皇后の尊影をかけ、其他種々の肖像額面等をかけ、そして綾羅錦織のとばりを垂れて居る。

◎ガラス窓を左右にわけ放すと褐色の光の波が送り出る。庭前には梅の花が咲き亂れて居るその梅の花は馥郁たる麝香を蒸發させる。そして若き工女の、巧に細やかなる指にて、あやつる機械の間にかをりが浸み込む。



◎工女の殆んど全體は可愛らしい。中には山だしのまだ世慣れないものもある。彼の凹んだ所の目は、三日月形の、彎曲した瞳の蔭になつて、微かな光を漏らして居る。愛しき微笑を湛へれば、眞白な齒は自然にあらはれる。結婚期になるかならぬ位の蠟造りの美人像と間違はれる有様だ。たしかに大厦高樓の中の、金銀を飾つた椅子の上の、綾錦に包まれて居る貴婦人ぞろひの中に置いても、最も人の注目を引くべき容貌を持つて居る。

◎此工女等の、小さい、弱々しい腕を見れば、非常に白くて、非常に奇麗で、接吻したくなつて来る。どんな者の成り果か、昔床しう忍ばれるのである。此や腕を殿しい職業の中に入れてはたらく。糊も持つ紙も持つ針も持つ、小刀も持つ、木も持つ、金も持つ、いろ／＼の物を持つて暇なくはたらく。

◎日和と云ふ者は、誠に徒者だ。黄金の髪の毛をそへけたせむ。頸に頬に熱い光をあて、色づかせる。着物の色を羊羹色にする。學校へ通ふ子供を、わきへ遊びに行かせる。店番の小僧を外へ出して、犬にけしかけさせる。『スクオラ』の工女に熱心をゆるめさせる。よい日和になると、彼の工女等の野心は、むら／＼起つて庭をかけたまはる。其顔は窓の外に向く。其口は笑を發する。又人の悪口を噂する。又外人の參觀者のある時に、監督者が、小言を云つたり、大きな目で睨めつけたりするとそれを、鳥籠の中の鳥どもが、一時に鳴き出す如くに、しやべくつて妨害する。

九、伊太利女子。其二

羅馬

一、ローマ、ボルゴの日曜日、若き、ねびたるをとめども、



六日の程の苦さを、つゞれの中に過し來ぬ。

けふは待ちたる其日とて、晴れの衣を取出す。

親の飾りし衣には、其いろつやの及ばねど。

二、世に時めさし國民も、うき世のさがと老いぬれば、

着たる上衣も何時しかに、昔の色はなかりけり。

さは去り乍らをとめらが、顔に粧ふくれなるの。

なまめく色は今も尙、ありし名残や留むらん。

三、美しからぬをとめらが、膚の色もしかすがに、

まとい衣のあやありて、見る目ゆかしくなりぬなり。

上の衣はすぐに垂れ、肩より腰にかゝりたり。

其襟巻は朝風に、なびく旗にも似たるかな。

四、いと肥たる其腕、廣き袖よりぬけ出でぬ。

胸は豊に、脊は丸く、弓の形をそなへたり。

堅き腰締まめつれば、腰はすがると細まりて、

袴の裾は廣どりぬ。ひだの折目もあやなして。

五、緑の髪はつやまして、銀の矢を留めたり。

頸には懸けしみまするの、玉のみすまる光るなり。

耳には耳輪打ちゆらぎ、金の色を放つなり。

三日月の目は霧深き、谷間に池を湛へたり。

六、晴の粧ひ成り立ちて、いとうるはしく成りにけり。

よそ目もいと嬉しげに、袖を連ねて立ち出でぬ。

行く手はいづこ、をとめらは、堤に沿ひて練り出でぬ。

すみれたんばは咲き匂ひ、春の日影はのどかなり。



### 第三章 亞米利加、大洋洲、亞非利加 女子の容貌風俗

#### 一、合衆國女子

◎合衆國女子は驕奢の代表者實利的文明の代表者であると云ふがよろしい。まだ高尚な優美な『雅致の花』を咲かせるに達して居るとは云はれない。併し合衆國女子は其國に於てはある意味の貴族である。黄金を以て作られた貴族である。其黄金で衣服も粧り、容貌も改められる。

◎當世第一流の大美術家ジョン、サルジエン氏は合衆國女子の肖像に就て説明して聞せられた。其女子の名は知らないが其肖像は或る博覽會の中に、久しい間陳列されて、人にアメリカ婦人の標本と呼ばれたのである。其肖像は起つた姿だ。兩足を揃へて居る。兩膝も接けて居る。身體は體操のために鍛へられて、模型の中に入れられたやうに締りがついて

居る。皮膚は白くてきめが細くて其中にたえず血液が循環して居るかと思見える。頭は落着いて伶俐さうな人相を持つて居て、批難すべき點を見ない。腕は丸くて、筋がやう／＼見出される位だ。手は奇麗であるが、尺が長すぎて、これが労働者たる合衆國人に配する所の女子の容貌であるとすれば、寧ろ可憐なものだ。

◎合衆國人は日々ワラル、ストレートの間に奔走して居る。商業工業等の經營に骨身を惜まない。汽車は高く空中の橋の上を走る。綱引き仕掛の車や、電気車は、遊んで居る彼等の子供を驚かせる。又西部に行くと大耕地がある。大鑛山がある。大屠殺場、お、いやな職業をする所もある。こんな所に出來た合衆國女子とすれば寧ろ意外の傑作である。

◎合衆國女子の尊敬される事は非常な者だ。フロレンスに於けるベアトリース女子のやうだ。ベニスに於ける藝者のやうだ。ミランに於けるト



者のやうだ。而して國民的の最大の名譽者のやうだ。そして其女子は愛情を持つ事がない。骨と肉とで固めた人形のやうな者だ。これがヤンキーの本色だ。

◎以上ブルージェエ氏の批評、その偏頗なる所を見るも亦一興である。

二、加那太女子

◎謹慎にして用意周到、勤勉にして舉止快活、家事を整理するに無上の適任者は、佛國種の加那太女子である。此加那太女子はすべての點に於て、本國女子と異なる所がない。別に苦勞して求めるともなく、婦人に於て缺べからざる、優美の徳と愛を引く術とを具へて居る。

◎婀娜たる女子の掌中に或る人種の道德的運命の、大部分は握られて居る。加那太女子は、其人種の風俗と信用とを維持して居る。尙此上に、其國勢を左右する程の権力を持つまでに、進むであらうと思はれる。加

那太女子が、つぎつぎの子孫に對して、其祖先の昔話をかたりきかせ、又其古い國歌を歌つてさかせる間に、祖先の呼吸を彷彿として子孫の腦中に吹き込み、佛國人種であると云ふ記憶を、永く其子孫に傳へるではないか。加那太女子が良妻として、賢母として其所に住居して、佛蘭西魂の擁護者となつて居ると或人が云つたのは實によく云ひあてられたではないか。

三、米國殖民地の女子

(エロロツバヒンアマリカ (歐羅巴人亞米利加の殖民地へ移住した者なリレオルと云ふ))

◎クレオル、其系統から云へば美人でなければならぬ。其容貌から云へば良妻でなければならぬ。など思つて來たのは、實は幼稚なる想像であつた。

◎モーリース婦人と云つたとして、讀者は一向わかるまいが、今其婦人を



借て、クレオルの缺點、事實として有り得べき缺點を擧げて見やう。

◎モリーリス婦人は其殖民地の唱歌教師である。此婦人が不思議な唱歌教授法を發明した。それを輕卒に口外する事はないが、自然此法によつて、人々の耳の、音樂の道に遠ざかつて居る所を直して行かうと心がけて居る。

◎其方法の特徴は科學の原則を應用するのである。兒どもは成人するまで、母の懷に育てられなければならぬ。其原則を應用したる開發的方法によつて、小な、頑是ない幼兒どもまで、毎日喜び勇んで稽古に来るやうにする。

◎其方法の一端を示せば、モリーリス婦人は彼自身にボール紙の額面を作つて、それに繪を置いて立派に彩色までする。子どもは面白くてたまらない。其繪に就いて婦人は貴重なる説明を與へるのである。

◎婦人は其額面に五線を引いて、下から二線目の『ソル』の所に、まんまなる顔だけかいて、『ここに白い顔を出して居るのは丸子夫人と云つて、其顔の通り、一人前缺けた所のない方だ』と教へる。次に上から二線と三線との間の『ド』の所に、横丁へ向いた瓜種顔の、白粉塗た顔の娘をかいて、其細い足をば、下の『ミ』の線の所までさげさせて、『これは白子嬢と云つて、丸顔の奥さんの聲の長いのを羨んで居る。』など教へる。其次には顔の黒いのもかいて教へる。

◎そしてモリーリス婦人は其額面にかいた婦人の優劣を比較して『丸顔の婦人は氣早の娘の二人分の力がある』など教へる。樂譜面の顔は各々其由來があつて、美人小説を聞くやうな心地して、忘れやうと思つても忘れられない。時にクレオルの風俗の説明は忘れてしまつたのですか——いや其説明はこれからすぐに始める。



◎或日モーリス婦人は妙な女子を我輩に紹介した。それを徐りと青葉茂れる椰子の樹の間の、釣寢床の上に寝かした。三人の黒奴娘が其側に膝を突いて、恭く其女子の覆面を取除いたところが、是即ちクレオル即ち殖民地女子であつた。其目は飽まで開いて天文を考へて居る。其小さい櫻色の口もとは鳥に接吻を與へるやうに見える。特に驚いたのは其頬が一面に痣になつて居る。何色と云ふのか名の知れない色をして居る。俗には日に焼けた色と云つて居る。

◎クレオルは此容貌に更に好ましからぬ性質を加へて居る。愛嬌は相應にあるとして、甚だ憐むべきは懦弱無氣力に其身を持ち崩したのである。常に長椅子釣寢床などの上に横つて、黒奴娘に團扇であふがせて、ぼんやりして一日を暮す有様は、誠に香氣此上なしとでも云はうか。

◎誰でも此日を過すには毎日或る時間を働かなければならぬ。處で、若

し我々が一時を働かなければならぬとすれば、クレオルは二時をついて働かなければならぬ。それでも四分の一音符の黒奴に較べると二人前はたらしきであるとは妙なものだ。(イウオンヌ氏)

四、ハイチ女子

- 一、ハイチよい島、娘は花よ。  
花の娘の、着飾る布は、  
青に紫、赤また黄いろ、  
色はいろく、お好み次第。  
二、青い手さしに、花色シヤツポ。  
猿の鼻にも、覆面はしち。  
面は黒檀、白齒が目立つ。  
袴たれては、足までかゝる。



三、歩む姿は、

小蛇のやうで、

あちらこちらへ、ぬたくり廻り、

すべりころんで、又起きあがる。

布の擦れおと、ざは、ざは、ざはと。

五、オセアニヤ女子

イ サモア女子

◎サモア女子は他の諸島の女子に比べれば一般に奇麗である。サモア女子は愛嬌もちで、好んで赤又青の、目立つた色に衣服を染めて着る。

ロ マオリ女子

◎新ゼーランドのマオリ人は、世人に長い間南亞米利加の白人の種だと思はれた。

◎マオリ女子は必ずしも立派に飾らうと迄は考へない。併締つた顔付を

して居る。そして腮と唇との様子を改める。

◎マオリ女子は悪い習慣がある。それは煙草を吸ふ事だ。朝から晩まで休みなした。しかし其女仲間では、いくら煙草を吸つても女ぶりのさがる事はないとして居る。なれども若し我々が一服やるならば、決してマオリ美人の人望を得る事が出来ないと言ふ事を心得て居なければならぬ。

◎マオリ女子に向つて、手を差出したり、接吻したいと云つたりしたら、彼は恐しがつて逃げてしまふ。其土地の習慣として、敵意のない、親和の意味をあらはすには、唯一の方法がある。それは何なりとも其人の持ち物に、其小さい鼻を擦り付けるのである。

ハ ファイジー女子

◎ファイジー女子は、天然に、漆のやうに黒い厚い髪の毛を持ちながら、



それでは醜いと考へて、石灰を塗つて色を付け、縮んだ硬い毛にしてしまふ。そして細い注意を以て、ブラッシで撫で付ける。そんなに大事にして居る髪の毛も、我々の目には、時々頭の上に海綿をのせて置いたのかと見える。

◎そのみならずフイージー女子は、派手な色の襟巻など着けて、しやれる事がある。おしやれの爲でなくては、衣服を用ゐる必要がないのである。

六、埃及女子

- 一、晴に晴れたる、春の日の空、河に輝く、しろがねの舟、漕ぎ行くあとに、名残をとめる。笛の音にまた、麝香のかをり。

二、クレオパトラは、夕日に立つた。

派出な姿を、たとへて見れば、

黄金づくりの、大きな鳥が、輝くへさきに、餌をばねらふ。

三、世の行末を、見る目を持たぬ。

榮えた薔薇さへ、下行く水に、

散りて流れて、とまりはいつこ、哀れはかない、埃及をとめ。

七、アルジェリヤ女子

◎いづぞやモレスク即ちアルジェリヤ地方の野蠻人の珍奇な大祭典があつた。祭場は立派に嚴重に幔幕を張り廻し、中央には音楽隊の壇を設けてある。第一に黒奴どもは一齊に重苦しい聲で唸り出して、そして小な



棒を持つて道戯踊をはじめた。

◎次に蠻族美人の一群ウレド、ナイルどもは、スフィンクス風に髪を結うてあらはれた。金の頸飾をかけて居る。腕輪に指輪にはめて居る。音楽隊は蹲つて歌ひはじめ。其内の一人は立つて、頬を充分にふくらかして笛を吹く。喇叭のやうな者で、鋭いきじり聲を出す。此笛吹きは容態を作つて歩んで其頭をば或はわけ或はさげ或は廻す。そこでウレド、ナイルどもは順番を以て、緩々と重々しく踊る有様は如何にも勿體ぶつて居る。右の手には白刃を棒げて、頭の上に揮り廻し、左の手は血のしたゝりを振りおとすやうにする。踊は皆このやうな悲劇めいた者ばかりだ。これも一種の美を有して居ると云はねばならぬ。

◎此他にアイサウアと云ふ踊がある。これは不潔鄙猥な真似をするので、我輩は説明することをはゞかるのである。アルメーの踊に至つては更に

甚だし。

◎モレスクの踊はすべて、覆面をして踊る。そして疲の來た頃になると、ユー、ユーの掛聲が出る。その掛聲と共に踊はやすみになる。

◎カスバーの姫君たちの中には、一人二人頗るの美人がある。其他踊兒らの如きは見るに足る者がないのみならず、化粧と云ふ事を少しも心得て居ない。ウレド、ナイルに於ても、モレスクに於ても。

◎富豪閑人等が冬の寒さを凌ぐために、或は畫工詩人などが材料をさがす爲めに、此アルジエリヤは一大樂園である。アルジエリヤに入る、時は過る。苦みは流れる。廣大なる理想は齷齪する所の思想を追ひ出してしまふ。然らば世の學者、賢人に取つても、いい保養場だ。

八、セネガル女子

◎亞米利加に於てこそ、女子程、樂して威張つて仕合せな者はないが、



東洋の支那日本諸國に於ては、全くこれと反對だ。もつと非道いは亞非利加黒奴女子の境遇だ。嗚呼苦い哉。女子として黒奴世界に生存すること。……が黒奴女子は矢張それで満足して居る。

◎セネガルに於ても、スーダンに於ても、ダホメーに於ても、黒奴はいつでも行軍に、其妻を連れて出かける。其妻と云ふは多く、他の種族から生捕られた女子の中で選ばれた美目のよいのだ。

◎セネガル黒奴の妻は荷物の運搬方を務める。そして其夫の傍に嬉しがつてまつはつて居る。長途の行軍にも、其一隊の後に頭の上に荷物をのせて、元氣よく従つて行く。其荷物は鐵砲と槍と、彈藥入と、其外には多量のグリグリと云ふ者で、グリグリとは銃創や鱈魚のさづや熱病など戰場生活に於て、主なる不幸を醫する所の必要品だ。

◎セネガル美人は小供の時から頭の上に重荷を載せて行く習慣である。

近邊のホツテントット人よりは評判よく云はれて居るに拘はらず、彼等の體軀は妙に曲つて居る。神から貰つた安樂椅子の上に腰巻一つで休息して、時間と云ふ事には全く頓着なしだ。

◎セネガル美人が他の種族の小娘をいぢめる所を見れば彼等も随分活潑な者だ。歐羅巴人をだます事も中々上手だ。しかしながら決して物品の價の懸直を云ふ事をしない。セネガル美人などオツな尊敬を與へるけれども、彼等の中には思ひの外に女丈夫のある事を發見する事がある。

九、スーダン女子

◎トンブクツ即ちスーダンの都會の、大種族の美人に關して、數言を費すべき必要がある。

◎バルバリア種族とアラビヤ種族との累代の混合に成りたるトンブクツ一人であるので其容貌は黒い顔ではある者の、餘程鍛へあげられて居る。

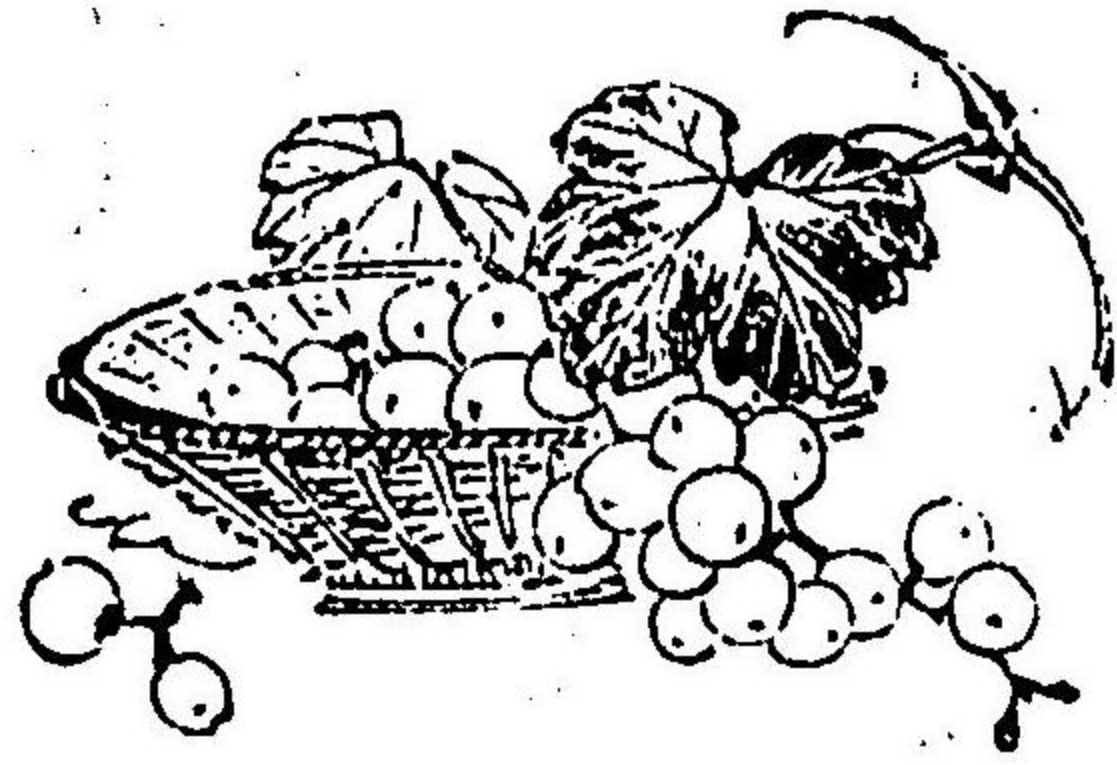


面相はキツト締つて黒奴と云ふよりも寧ろアリヤン人に近い。鼻は平たく潰れて居る。唇はやゝ反つて居る。そして目は大きくて、賢さうで、愛嬌を含んで釣合がよく取れて居る。

◎此天京の長所に、更にトンブクツ―美人は男子の愛情を引寄せる方法を心得て居る。そして又アラビヤ種族或はネグロ種族の好尚を心得て居る。其爪に彫物をする。其睫毛と眉毛との間にアンチモニ―の飾を付けて眼光を鋭く見せる。其額に眞珠の附た細い紐を巻き付ける。或は造花を飾り付ける。巧みなるホンボン結びと云ふ束髪を以て其頭髪を整理して透し彫りの軽い金の玉を附ける。其耳に亦同様な金の玉を下げる。其襟元をひろげて琥珀又は珊瑚の頸飾を豊にかけて、青銅色の膚は雅致ある意匠を加へて飾られてある。トンブクツ―美人等は、種々の好を以て布片をまとふ事を知つて居る。其布片は或はガス織、或は歐羅巴又はア

ラビヤの編物、或は國産の腰巻等。

◎トンブクツ―女子は其家内の始末、即ち子供の世話、勝手向の世話等、一切手がける事がない。皆其男奴隷或は女奴隷にまかしたりである。女子教育は、其所にも有るべき者としたならば、裁縫家事等の學科は必要がない。兵器運搬法が第一の必須科であらう。





### 第四章 東洋の舞蹈

#### 一、舞蹈に就て

◎詩歌は單純なる言語よりは雄辯であつて音樂は詩歌よりも感じが深くて舞蹈は音樂よりも人の心をひくと、詩人が説明して居る。一寸考へると舞蹈といふ者は僅かに優美の姿を見るに過ぎないと思はれるけれども、埃及希臘等の古代にあつては舞蹈は毎に宗教的の儀式、國民的の儀式の時に無くてはあらぬ者となつて居た。舞蹈は目に見えない思想感情を形にあらはして見せる。舞蹈は神聖といふ觀念を活かして動かせる。舞蹈は默識する所の衆人の心裏を寫し出すと云ふ理屈がある。

◎それは只古代の埃及希臘等のみならず、東洋の印度でも印度支那でもマレーでも支那でも同じ事だ。東洋諸國の人々は好んで默坐空想に耽る

靜かな音樂を以て調子づけた舞蹈もまた好むで居る。東洋の舞蹈には活潑な急劇な運動が甚だ少い。

#### 二、神聖舞蹈(印度)

◎舞蹈の説明は印度のブラマ、ヴィクス等の奇跡に忠實なる信者の眼に映する宗教歴史を明かにするに甚だ必要だ。印度に於ては神聖舞蹈の外には宗教的の儀式としては何の儀式もない。其神聖舞蹈は國王の宮殿の中で行ふ。其奥殿で。唯神聖舞蹈の心得あるものだけ居る處で行ふ。柱がくしを以て包んだ柱の間に於て、想像的怪物をすかし彫した長押の下に於て、黒或は赤に染めた大理石の奇怪なる偶像、或は鍍金して金光燦爛たる偶像の前に於て行ふ。

◎其厭ふべき憎む可き容貌を持つ所の偶像の足もとには諸の供物諸の犧牲の禽獸を列べておく。香の煙は雲の亂れて立ちのぼるやうだ。妙な



ランプは奥深く寂しげな軒端に瞬きながら光て居る。  
◎音楽今や低く悲しげなる調子で、響き渡る。其時黒い顔の進まぬげな顔をして出て来るのが即ち神聖舞踏の踊兒だ。絹の衣を着て、瓦斯織の布片を頭に巻き付けて、光り輝く寶石を持ち、板金または小鎖を持ち、素馨の花や、ローチユの花を、髪の中の挿込みて出て来る。からだをゆがめて容態を作つて歩く。其ふるまひ甚だのろい。そして神の變幻自在なる事、神の功德のいちじる事、宗教の不思議なる事等を踊るのである。

◎神聖舞踏の踊兒は神の配偶者或はテヴァタチの支配の下に附て居る。最高の種族の中から撰み出される。そして幼少の時から宮殿の内にいられて踊の稽古をして居る。歐羅巴人のみならず、印度人の或る種族以外の人盗み去ることを恐れて居て、決して彼等が神聖の場所と思つて

る所の、奥殿から離れる事がない。

三、ノーチニー舞踏(印度)

◎印度神聖舞踏は、他にストラダージ又はノーチニーなど云ふのがある。ノーチニーは婚姻の祝儀又は晴の宴會のをりに諸王の邸内にも豪族の邸内にも踊る。其ときには、踊兒は踊賃を高く取つて、宮殿の金庫に納める。一踊百ルピーよりやすくない。

◎ノーチニーは音楽の調子に合わせて、踊る者である。四人か五人の音楽師は、敷物の上に丸く坐らせられる。一人はヴィオロンに似て、音の鋭い、サランジの胡弓をならす。次の一人は、サナイと云ふ二つ穴の笛を吹く。其次の一人はドラカ及びシヨラゲーと云ふ太鼓を打つて、踊の足拍子を揃へさせる。宮殿の他でも、このノーチニーを真似て、神聖舞踏を踊る。それから服装は中々立派な者だ。銀で繪を書いた着物に、



金の縁を取つた瓦斯の着物に、寶石を縁に付けた紗の着物に色々だ。

◎ノーチの踊のある晩には、其所に金満家連中、今日を晴と着飾つて、光り輝いて寄つて来る。見物人は曲のないかけ聲を、辛抱強く繰返すと、漸々踊兒が出て来て、頭からかぶつて居た布片をひろげて、甲虫の大きな赤い羽をひろげたやうに見せる。

◎印度には他に祝日または、祭典といふ者が無い。ただ此ノーチがあるばかりだ。西洋人の來客がある時には印度の有志者は大騒ぎをやつて、四人の踊兒をわつめて接待する。西洋旅客は常に退屈に困められる。此のノーチの見世物は、不思議な愉快である。

四、通俗の舞踏(ジャヴァ)

◎これは東洋諸國一般にある所の弊風だ。古への宗教舞踏、戰爭舞踏は今日にも見世物といふ名稱で残つて居る。讀者は千八百八十九年の巴里

大博覽會で、ジャヴァ國のサナトガ人の神聖舞踏を見たであらう。

◎昔は此踊兒は、印度のダヴァダジのやうに、宮殿の附屬物であつた。今日は滑稽演劇の役者のやうな者になつた。古參の踊兒又は芝居の世話役の指圖を受けて、島王の邸内や和蘭の貴紳の邸内で踊る。其のからだは矮小。其顔は青銅色に光つて居て、こはいけれども、悪氣のなさうな所が見える。其の堅い服装は金の縁取つた木綿である。其の頭髮は御堂の屋根の形に作つて百派根の大きな枝と花とを其の周邊に挿す。そこで此踊兒は、全く、寶石を付けた、頸飾をかけた、腕輪をはめた、耳環を下げた、一つの小さい人形と見える。

◎ワキアム、タミナなど云ふジャヴァの踊兒は、巴里人のおなじみであるが、ジャヴァの踊の眞味を味ひたいと思つたなら、ジャヴァ風の装置でやらせなければならぬ。島王或は其の王族の宮殿の中に石像の二つ







六、日本の舞踏

◎日本の舞踏は如何。盛大なる儀式の中に若い踊兒、小いゲイシャ、甚だ大きく廣がつてる絹の衣服に、其のからだは埋没して居る。黒髪の大鬘は、金のつないだ玉で、括つて居る。小な身振で、踊る所を何かと云へば、天神の記念、國神の記念、豪傑の神の記念である。併し宗教的の感情は、あまり含まないが、兒供らしく趣味あるものだ。尙ほ他に日本國民の優美なる思想を、充分に説明して居る所の舞踏がある。蝶の踊、花の踊、雨の踊、茶の踊、扇の踊、酒盃の踊等。

第五章 西洋美容術

一、婦人の化粧のしかたに就て

◎「美しくありたい」、「若く見せたい」と云ふのは、女子の殆ど全體の望である。女子の心は、寢ても覺めても唯他人の眼によい姿を見せたいと云ふ事ばかりである。

如何なる女子でも、昔から「おつくり」と「すがほ」と云つて來た事を心得て居る。それで、其顔のくせを直すために、其顔の可愛らしく見え

るために、色々の工夫をこらすのである。  
◎女子が其美を保ち、又其美を完全にするには、技術と學理とを應用して、其効を收めなければならぬ。或は化學、或は醫學、或は外科學、或は圖畫、或は生理學、或は彫刻學、或は礦物學等、皆美容術の助けに



なる。そして其外に時間と費用と苦痛をこらへる所の辛抱と、必要である。

◎東洋の女子の厚化粧を笑ふ人もあるけれども西洋婦人も決してそれに劣らない。或はそれよりも越えて居るかも知れぬ。西洋の交際社會では男子でさへも殊に軍人でさへも、白粉を塗つたり、コスメティックを着けたりする。以下記載してある美容術は必ずしも現今流行の法を傳授する考ではない。却つて其馬鹿らしさを笑はんと欲するのである。

二、奇妙な入浴法

◎入浴の効能は皮膚のきめを細にする、皮膚の色をわびやかにする、しかしローマの諺に「Similia Similibus。」同様から同様に」と云つて通り、只の湯の中に入ただけでは、面白くないと考へて、古代の女子は油の中に入り乳の中に入り第一につやを出し、第二に白くしやうとした。

うまく行たか保證は出来ない。コリントの女子は香氣あるオリヴ油の中に毎日二時間づゝもぐつた。ローマの美人は毎朝蒸気浴をして、次いで按摩をとらせた。それから、ポツペーの皇后は驢馬の乳の中に入浴する事を考へ出して、一日に二度づつ驢乳浴をやられた。御旅行の時はそれがために幾百の驢馬を御引きつれになつた。それからタルリアン婦人は覆盆子の汁で風呂をたてゝ入つた。其うちに葡萄酒の風呂、シヤンベニウの風呂を發明する人もあるかもしれない。或る佛國醫師は病人に鮮血浴を命じた。「それで田舎の屠牛場の傍に其風呂を立てた。」

◎近時の學者は此等の奇妙の入浴法に尙ほ學理より割り出した所のグリセリン浴法、鹽化アムモニヤ浴法、化學浴法、電氣浴法等を加へていよいよ入浴法がやかましい者となつた。驚くこともなければ、いやがる事もない。百合の顔、薔薇の顔のためには……。



三、顔の上の壁塗り

◎装飾に熱心なはてには、毎晩毎夜假面をかぶらなければならぬ。ロ  
ーマでは女子のみならず、一般に假面をかぶつた。これは家族の假面、  
これは旦那の假面と云つて居た。特別心得ある奴隷にそれを造らせた。  
蠶豆の粉の糊または海鳥の皮の粘汁を以て造らせた。其他には牡羊の脂  
肪でも造らせた。

◎佛國では假面は十七世紀まで用ゐた。アンリ三世は假面を麥粉と白卵  
とで固めて夜分は其顔の上に貼付けて置いて朝になると山人參の洗粉であ  
らひおとした。夜分眞實の顔のやうに見せる假面は、豆の粉と、新い  
乳と、オリヴ油と、蜂蜜とで作らなければならぬ。歴史家はこの假  
面を嘲つて「石の顔」と云つた。

◎尤も鮮麗なる顔色とあるために、鮮血滴る所の牛肉の薄片を頬にあて  
て暫く糊帶を以て締め付けて置く事がある。此方法は化學的の入浴法よ  
りも砒石と云ふ毒物を服するよりも安全で有効であると見える。

四、皺に就て

◎唇の隅が凹んだり、目のまはりに皺寄つたり、額の上に四海波寄た  
りする。之を療治するには色々の器械が入用だ。木に作つたり、金に作  
つたり、植木屋の持つやうな道具、字消し道具、研ぎ道具、粉煉道具、  
色々ある。これで揉んだり撫でたりする。

◎電気療法もある。顔の皺のある場所に五つ又は六つの電入點を置いて  
同時に電流を入れなければならぬ。まかし其電気は極めて弱くて、無數  
の集合點が必要なのである。

◎施術はどうしても苦痛を免れない。又完全に治療するには内科醫術の  
力を加へなければならぬ。或は瘦るか、或は肥えるか、次に皮膚の療治



にとりかゝるのだ。  
○一つの皺は三ヶ月間毎日二時間づゝ機械療法或は電氣療法をすればなほる。

五、毛を抜く

○これは女子に對して、甚だ苦痛を感ずべき體罰であると云はねばならぬ。其施術は甚だ困難なるのみならず、随分危険なわざである。

○エヂプト女子、ギリシヤ女子、ローマ女子は此厭ふべき苦痛を受けた。有力なる方法を以て毛または細毛を抜き取つた。鉄でも抜く。また毛抜薬でも抜く。毛抜薬は生石灰に松脂をまぜた膏薬で東洋でルヌヌと云ふ腐蝕性酸類である。或る度まで皮膚を焼てくさらせるのである。

○近時の施術者は之を應用して堅木の針を作つて、其先は極ざれいに尖らして、それを結晶性醋酸の中に沈めて、次に抜かうと思ふ毛のある膚

に着ける。それからピンヌで軽く引く。暫くの間此木の針を着ける時は、皮膚が段々柔かになつて、毛がたやすく抜けるのである。

○電氣でも此施術が出来る。其毛のもとにプラチナの針で四から五ミリアンペールの電流を通してやる。時として痕跡を残すことがあるけれども、頗る効能のある方法だ。

○熔鐵を用ゐる事は最後の手段であつて、最上の苦痛である。

六、顔の皮を新しくする。

○日本風の顔の皮むく事は別に六かしい施術でもないやうだが、絹糸を以て瘤を締め取り、酸類を以て黒子を焼き取り、金の薄板を以てあざをむき取る事は數週間を費さねばならぬ。ポーバルネーのジヨセフヒンは其顔を妙な色に見せた所の、赤雀斑の六十を、小刀の先で悉皆抜き取るまで辛抱した。



◎巴里の有名な女優者が其顔相を損せず外面を改めたいと思つて此奇術を行ふ醫師を求めて、ロンドンに滞在する事七週間に及んだ。——七週間打續いた苦痛の施術——顔の皮膚がすべて化學的に焼けた。そこで片端から其さたない皮を剥ぎ取つた。二ヶ月の終にはもとの皮膚はもとをとりぬない。そして今生れて来た人の皮膚のやうに柔かきで蔷薇色した新しい皮膚が出来た。

七、痣に就て

◎すでに毛を抜く法を覺えた。又わざ及び黒子を除くことを覺えた。其次にはどうだ。それと反對あはたらきには、平な皮膚に凹凸をつくり、其顔に人造の瘤を飾るのである。わざを加へるのである。

◎十八世紀に於て婦人が顔に黒星を飾る事が始つた。ゴム塗りの黒い絹に、月の形、新月の形、日の形、星の形、彗星の形を截つて、十二宿の

意味を象つて、顔の上に貼り着けるのである。これはルイ十五世の宮中に於て必要事件であつた。其黒星を額の上には、目の側に口の隅に、額の邊に着けるに、特別の方式があつた。特に門閥ある婦人は、着け替へるために、常に黒星の箱を持つてゐる。時々新模様の黒星を付け加へる。此黒星は其特質によつて其名を異にした。耳の隅の所のはバッシヨネーと云ひ、頬の中央のはガランテと云ひ、鼻の上のはエフロンテと云ひ、唇の側のはコッケットと云つた。いやはやとんだ裝飾もあつたものだ。しかし今日でも我々は皮膚に茶色の樹脂のかたまりを着けて、優美とする風習ある事を見る。

八、容易く實行の出来る秘事

◎今や顔の裝飾の最後の説明に達した。ここに一二の秘事を傳へる。第一に眼に就ていゝる。眼瞼を大きく見せ、黒く見せるに就ては、古人も



既に承知して居た。ラテン詩人オヴィドの言にも見える。今日では只外面ばかりの變形ではない。アトロピヌ及びベルラドヌ等の毒物を眼瞼の中に吸収させる時は、ふくらかす事が出来る。又目のまはりを大きくするには鉛筆の先でうまく瞼を外の方へ延べたらよろしい。そしてインデアンと云ふ黒い繪具に瞼の膜を染める時は、いさゝくした光を放たせられる。

◎眼がよく縁取られたために、眉の弓もはつきりと見える。睫毛も濃く見える。一部の毛を抜く事と揉あげ法とは共に眉の形を改良出来る。ペートル大王の宮中に於て露西亞の美人は眉毛を全く抜き取つて濃い黒鉛を以て畫いて眉の代用とした。人造睫毛は軽くコロデオンを塗つて天然睫毛の間に植ゑ込む。かやうな技術はすべて毎日少しづつやつて行かねばならぬ。ベルラドヌ毒草の効能は一時的である。繪具は、顔を汚す

恐れある。人造睫毛はいつまでも安全に固着するとは保證出来ぬ。

◎今や女子の顔は一つの繪具板となつた。そこに白、赤、緑の諸色が、顔色を若々しく、美しく見せるために調合されて居る。

◎白繪具は銀、白、或は眞珠、白と云ふ。これを最初の地の色にする。

此繪具のものは、白石(アルパトル)を砕いた粉末である。其製造所は、巴里に特別に設けられてある。毎年毎年此白石坑は美人の顔のために掘り廻らされる。此繪具は綿または毛筆を以て顔の皺のある所には最も厚く塗られる。赤繪具は紅梅から深紅色まで十數種の色合の中から撰り出す。これを顔の表面の色にする。頬骨から頸の付け根の所まで塗る。最後に色鉛筆を以て脈のやうに青い線を引く。これで一つの油繪が出来あがる。

◎種々多様な化粧術に付て女子は精細に注意をして居る。我々は今更之



を論ずる必要もないやうだ。夕方になれば紅、芝居に行けば紅、市街に出れば紅、田舎に行けば紅、海に行けば紅、旅行すれば紅、湯に入れば紅ではないか。祝祭日だから化粧、葬式だから化粧ではないか。

◎然るに近頃になつて繪具を塗る代に、エメーヤトジユと云ふ方法が流行し出した。それは顔の上に、油薬を以て外皮を製するのである。其外皮は薄くて堅くて透き通つて色も程よく付けられる。どんなに上手に、繪具で化粧しても長い暑には堪へないから、それに對する改良方法を考へねばならぬ事にあつたのである。エメーヤトジユは固形物で作るのであるから數週間保存する事が出来る。其不便な點はまた其堅硬な點にあつて、笑つたり、怒つたりした顔つきを見せる事が出来ない。又其施術も色付けた薬を顔の上に流して、それが冷えて固まるまでは、随分長くかゝつて苦しい。酸類を用ゐるに就ても危険がある。エメーヤトジユの

或る部分は二三日間暗い部屋の中で造られなければならぬ。

◎エメーヤトジユが餘り強く出来た時は皮膚が始終痛みを感じる事があつる。これが此秘術に對して不安心を與へるのであるが、其美顔のためには、大奮發をしなければならぬではないか。

九、髪かざり

◎把く。摩擦る。磨く。電氣かける。紅、白粉をぬる。目を大きくし、また光らせる。それで顔は光輝を發する。さて此上は戴冠式だ。似合た髪結ひをするのだ。一時は黒髪であるよりも茶色、鹿の子色の髪を望んだ。そして假髪を入れずに薄い髪を散らばして居た。

◎東洋女子及び埃及女子は、支那墨及び薔薇水の染料を以て其髪を黒くして居た。猶太の小娘は其髪を光らせるために、金粉を用ゐた。それが今日の我が女子に粉付け結髪の法を教へたのである。ローマの美人は紫



或は緑の金粉を用ゐた。其使用法が奇妙だ。毛茸と云ふ毒草の汁に、鼠の頭の黒焼を混ぜたのだ。佛國の昔の女子は粉末を使用して、シャトルル世の頃には、すみれ色或は茶色にした。十七世紀から十八世紀まで、ルイ十三世の頃には只白い粉だけを使用した。化粧品商人が、千七百八十三年に於て、巴里の都だけでも、其髪結ふに使用する澱粉の、驚くべき多量に上ることを叫んだ。即ち其粉で毎日一萬人の貧者に食せられるといつた。

◎現今の化學で粉の力を假らずとも、不思議な色合を作られる。或醫師がポツタース製造所をおとづれて、工女の髪に愛らしい色を付ける事を教へた。ポツタースを臺にして、或る物を配合すると、すぐに淺黄色を生ずる。これが近頃大流行となつた。又偶然の出来事で灰色の髪が、茶の汁を付けるときには栗類になる事がわかつた。すべて黒又は緑に髪を

色を付ける染料は毛の氣力を弱めるか、または若禿を催す恐れがある。◎最も美しい天然の髪は最上の髪にはならない。ドスボルタ氏の記する所を見るに、『マリー、スチエワルト女王の斷頭場に引き出された時、獄卒は白刃を揮つて、憐むべき女王の頭に加へた。そして其髪を握つて、鮮血滴る所の首を取り上げて、衆人に示し聲の限りに、『ゴッド、ゼーヴ、ゼ、クイン、エリザベス』と叫んだ。然るに其首は床の上に落ちて、其手には、たゞ髪ばかり、残つた。其髪は茶色であつて、並々の品ではなかつた。』とある。髪製造は、十八世紀に至つて漸く完全に達した。ロージュ、ドペラと云ふ髪に結ぶ時は腮の下から頭の上まで七十二ブースの長さになる。其他種々の意匠を凝して髪を結ぶ。千七百七十四年に、シャートルルの公爵夫人は、芝居見物に圓錐體の形に髪を結うて行つて人目を驚した。



◎今日の髮結風は澤山の髮を持たながら、尚ほ人造の毛を使ふ。毎年佛國に製造する髮の毛は、十八萬キログラム、かつらの數は三千萬個に達する。これは人造美術品に付きての最多額の費用である。巴里婦人一人の髮の毛の費用に、十五人を生活させられると云つた者がある。

一〇、女子の結髮は一の美術

◎若し着用する所の衣服が、形式によつて束縛された者とすれば、結髮を撰擇するに就ては、甚だ自由を持つと云はねばならぬ。結髮が大きいか小さいか、緩んで居るか、緊つて居るか、黒色か、茶褐色か、規則的か、不規則なる間に合せか、いづれにしても其顔の調和をとつて結はねばならぬ。美貌の女子も髮結の風によつては其美を失ふ事もあり、之に反して、巧なる整理によつては愈々其美を増すことをも得るのである。

◎髮結の方式を三つに區別する事が出来る。第一は頭の中央に結ふ事。

第二は後頭に結ふ事。第三は右又は左の側面に結ふ事である。普通の結ひ様は第一圖の如く中央にシャンと結ふのである。これは常に同じ場所を塞いで居て腦のためによくはない。次に第二圖の波巻は額或は耳を隠す所の結ひ方よりは廣く一般の女子に適する。其中にも卵なりの僻のない顔に、最もよく適する。この結ひ方をすると、若く鮮麗な顔に見える。次に第三圖の如く、髮を三部に分けて、渦まきと云ふ結ひ方もよろしい。これは中央に於て、大きな環に巻いて、額の前方へかからせるのである。全體結ひ方が、あがると、さがるとは、顔の形に非常の變化を及ぼすものだ。第四圖の下り巻きは後頭に重く下つて居る。頸の細長い、顔の奇麗な人に適するが、厚う太つた顔には、似合し

◎支那風に緊く結ふ時は、飾とならない。緩く少し膨らませて結ふ時は、



若々しく顔に似合ふやうにする事が出来る。第五圖のツアヌ巻はすべての髪を寄せて、頂の上に一つの塊をつくるのである。これは髪の少ない人によろしい。第六圖のサン、シニヨン巻は、前の方から見えないやうに隠してしまふのである。若し澤山の髪を持ち、肉づきのよい太つた顔を持つならば落し結び(第七圖)をすればよい、頂の上に大きな櫛でとめて置くのである。薔薇の花をそこへさすと美しく見える。第八圖及び第九圖の後頭結びは、おだやかで、可愛らしい風だ。晝は波形の髪を額の正面に膨らかして夜になると、小さいらの花かざりを波形の低みの所に櫛でとめて置く有様は若い奇麗な令嬢に適する。最も優美な品格のよい結び方は第十圖の高貴結である。其手際と其苦心とは感歎する價がある、結び目は頭の丁度よい場所に、少し高く起て居て、前額にかかる髪は、工合よく整理されて居る。最後に二種の結び方を示す。一つは上の

方へ結びあける。第十一圖の玉結びであつて、他の一つは下の方へ結びあける。第十二圖のロール結びである。これらは、單純な品のよい方法を以てヒツタリと整理し、それから櫛で髪のみを充分にふくらせるのである。結び玉は、自分の髪の毛だけでつくる。此結方は、高くもなく、低くもなく全く普通の體裁で、黒い髪、ハッキリして顔の、強壯な女子によく適する。

一一、齒の修繕、鼻の製造

◎口に付いても手数がかゝる。唇は赤くする。齧は紅梅色に染める。舌は奇麗な天鵝絨で時々なでる。齒はまた意の如くに修繕する。鼠色の漆喰に、齒を覆ふ事、又齒を黒く染る事等は、野蠻人の間にも行はれるが、亞米利加女子の間にも、面白い習慣がある。齒の凹んだ所に、又はわざしく穿り込んで、そこへルビー、眞珠、金剛石等を嵌めて微笑を漏



らすと共に、口の中から星の光のきらめき渡るやうにする。

◎耳の標型を用いた事は、随分古くから行はれた。

◎鼻の製造とは珍しい施術でないか。鼻は顔の中央にあつて、肝腎な位置を占めて居るから、その美と否とは、最も大事な者だ。鼻は修繕することが出来る。又大きくする事が出来る。又思ふ通りに曲げる事が出来る。まづ第一に電氣を用いて、やにの着いて居る鼻の洞穴を掃除する。これは此奇術に、効能あるのではない。さて氣に叶つた鼻の標型を取つて、鋸をのばしたのでよし、眞直なのもよし、曲つたのもよし、それを、より取つて漆喰の模型をつくり、其漆喰の模型を我が鼻の上にあてる。それから鼻の皮膚の中に純粹ワセリンを注射してやる。ワセリンは皮膚の中に入つて、皮膚を膨らかして、其模型に間隙なく密着する。それをワセリンの固まるまで壓して居て其模型、を取り去る時は、

立派に望む所の鼻が出来て居る。

一一、身體を長く又短くする

◎美と云ふも釣合を見ての事である。あまり身體が大きくても、小さくても、あまり足が長くても、短くても、あまり頸が高くても低くても、あまり胸がふくれても、細くても、美と云ふ事に疵がつく。

◎身體が肥えた女は帯を強く締め、瘦せた人は衣服を着重ねるは、普通のことだ。中世から今日まで、目に見えない電氣と云ふ帯を締める方法をとつた。

◎手の短い人は瑞典の體操をやつて見たらよい。機械によつて、二或は三センチメートルを延べる事が出来る。

一二、美術的歩みかた、坐りかた。

◎最早お仕舞か。いや。まだ一つある。歩み方を學ばねばならぬ。笑ひ



方を學ばねばならぬ。わざとらしい身ぶりが、少しも見えなくて、よく調子が合つたふるまひをする事を學ばねばならぬ。  
◎或る美學教室の中では、床板の上に印をつけ置いて學生が美術的歩行に慣れる爲めに、其上をふませる。又種々の椅子卓子など並べて置いて、優美に着席する方法など稽古させる。又美術的に食事する事まで教へる。我國の小笠原流の禮法は、美術的であるかないか、我輩大に疑つて居るのである。



第六章 女の軍人(附録)

◎申すも恐多き事ながら天照大神が素盞男尊の亂暴を打ち懲しなされる爲に男々しく武裝しなされたことは古事記日本紀のふみどもに、書き傳へられてある。又神功皇后が、三韓征伐に御出なされた折にも、鞆を帯び、劍を佩き、弓矢をたばさみ持ちなされたと申す事である。橘媛が日本武尊の御東征に随ひなされた事、上つ毛野の形名の妻が、夫を陣中にはげました事など毎に我が朝の女性の、武勇に富みたる例として引かれる。尼將軍とは、源の頼朝公の寡婦の事、巴御前とは、旭將軍木曾の義仲の夫人の事、板額とは越後の鳥坂の城の戦に、一騎當千の武勇をあらはした女の事である。  
◎我が朝神代の時から、男女同權といふ風でなかつたけれども、古の女



は、今の女のやうに、一筋にかよわく、なよなよしいものでは、なかつたらしい。随分雄々しく男子にも、をさをさひけをとらない様な女も多かつた。

◎西洋、とり分けてはアメリカあたりは、只今男女同權など騒いで居る趣もさこえるが、却つて古代は女のえらいものが少なかつたやうだ。若し、ジャンダークがなかつたら、西洋の女の歴史は誠にさびしい者だらう。

◎こゝに西洋諸國の後妃の方々の、軍隊の指揮官にあらせられている事を紹介しやう、併し此の士官の方々は、御身に軍隊の服装をいかめしくおめしなされるけれども、右向け、一、二、などと、兵士を指揮なされる事はない。ポリヴィエンヌ兵の伍長と聞えたる、使徒サン、ピエルのそれよりも、指揮なされる事がない。唯、晴れの儀式に、軍隊の檢閲をな

さるばかりである。

◎これは各國の主權者(帝王)間に於ての慣例である。しばらく交誼を保つために、ある國から、他の國に贈る所の、賄賂的名稱である。例へば、サドワに於て、獨逸軍隊が澳帝フランソア、ゾセフ陛下の兵と戦つて、大勝利を得た時に、澳帝陛下は、名譽の名稱を、獨逸軍隊に贈られた事があつた。朝鮮に於て、我兵が、明兵と戦つて大捷した時に、明帝は、日本國王の名稱を、太閤秀吉公に送られたのは、同じやうで違つて居る。それはどうでもよい、此慣例が始められてから、今日にも傳へられて、今日我々は武装した、御されいな、女將軍を見る事を得るのは、幸福の至りである。

◎獨逸の母后陛下は、スレスウイグ、ホルスタインの幼年聯隊の長であらせられる。併し陛下は其の隊の軍服を御召しなさらず、近衛騎兵の白



色肋骨の軍服を、御召しなされる。馬に召され御子ギヨーム二世(現皇帝)の、御前に立ちて軍隊を檢閲なされ、左顧右盼の御風姿は、あつばれ見事に拜觀される。

◎獨逸現皇帝陛下の、御三人の姉妹の方方は、皆それぞれの隊長であらせられる。

◎イタリヤのマルゲリット后陛下は、獵騎兵の隊長であらせられる。陛下は、獨逸御旅行の終りに、マルブルグに於て、御軍装の御寫眞をとりなされた。

◎ルーマニヤ國のマリー妃殿下(皇太子妃)は、軍服をおめしなされ、其の上、毛皮の附いた、黒の大マントクをおめしなされた御有様は、誠にいかめしう見奉られる。殿下は、ハツサード騎兵第四聯隊長であらせられる。

◎お若い女王、和蘭のウイルヘルミナ殿下は、プロシヤハツサード騎兵第十五聯隊の大佐であらせられる。

◎まだあらせられるが、もうこの位にしてあきらめしやう。





第七章 東西の格言俚諺(附録の二)

一、日本

○我ハモヨ、女ニシアレバ、汝オキテ男ハナシ、汝オキテ夫ハナシ(古事記)

○ありがたき者。しうとに譽めらるゝ聲、又姑に思はるゝ嫁。(枕草紙)

○よろづにいみじくとも、色好まざらん男は、いとせうざうしく、玉の杯の底なき心地ぞすべし。(徒然草)

二、支那

○在天願作比翼鳥、在地願為連理枝。(白樂天)

○貴易交、富易妻、人情乎。(光武帝) 貧賤之交不可忘、糟糠之妻不下堂。(宋弘)

○牝雞之晨、惟家之索。(書經)

○未嫁從父、既嫁從夫、夫死從子。(禮記)

○逆家子不取、亂家子不取、世有刑人不取、世有惡疾不取、喪父長子不取。(禮記)

○不順父母去、無子去、淫去、妒去、有三惡疾去、多言去。竊盜去。(禮記)

○唯女子與小人爲難養也近之則不遜遠之則怨。(論語)

三、印度

○女人地獄使、永斷佛子種、外面似菩薩、內心如夜叉。(唯識論)

○女人有五種障也。(法華經)

○清風無色猶可捉、虺蛇含毒猶可觸、執劍向敵猶可勝、女賊害人難可禁。(智度論)



- ◎ 女人之體、幼則從父母、少則從夫、老則從子。(智度論)
- ◎ 女人大魔王、能食一切人。(涅槃經)
- ◎ 女色世間重患、凡夫因之至死不免。(訶欲經)
- ◎ 以三女人髮爲三作網維、香象能繫。(大威德陀羅尼經)

四、西洋

- ◎ Silent is fine jewel for a woman, but it's little worn-English. 寡言は婦人の美德であるけれどもこれを持つ婦人は少い。英國。
- ◎ The wife is the key of the house.—F. 妻は家の錠前。英國。
- ◎ A good face needs no paint.—E. よう顔には白粉がいらぬ。英國。
- ◎ A woman's strength is in her tongue.—E. 婦人の力は舌の上にある。英國。
- ◎ Beauty is potent; but money is more potent.—E. 美貌には勢力あり。

- ◎ ちれども金錢には、一層勢力がある。英國。
- ◎ Femme sage s non ménage. F. 其家所に賢妻。佛國。
- ◎ Ce n'est pas à la poule à chanter devant le coq.—F. 雌鳥は雄鳥よりちれども鳴かぬ。佛國。
- ◎ Dans cette maison la femme porte Culotte.—F. 此家では細君がズボンを穿みます。(かか天下をゆめける語)佛國。
- ◎ Le lot des femmes est d'adoucir nos traverses.—Napoleon I. 婦人の運命は男子の苦痛を軽くするにある。那翁一世。
- ◎ Une belle femme plait aux yeux, une bonne femme plait au coeur; l'une est un bijou, l'autre un trésor.—Napoleon I. 美妻は目を悦ばせる。良妻は心を喜ばせる。美妻は寶石。良妻は金庫。那翁一世。



◎L'odeur de tabac ne vous gêne pas ?—F. 煙草の香を邪魔でござりますか。(婦人客に男の喫煙客が挨拶する語)佛國。

◎Ce que femme veut, Dieu le veut.—F. 婦人の望みは神の望み。(婦人の精神は神聖なもの云々意)佛國。

◎.....Rara est concordia formae.

Atque pudicitiae.—Latin.

容色と貞操との一致はされなものの。ラテン詩句。

◎.....Res est forma fugax: quis sapiens bono

Confidat fragili ?—L.

容色は逃げやすきものだ。如何なる賢人が、其様なはかない幸に信用を置くか。(馬鹿でなくては容色に迷ふまいの意)ラテン詩句。

◎Spectatum veniunt, veniunt spectentur ut ipsae.—L.  
芝居見に来る。自分も見られに来る。(ラテン詩句)

萬國女子風俗 終



茶  
受  
談  
語



# 茶受談話

内田茂文著

過去に於ける文壇瑣話

十年経てば一昔と一口に言ふが此一と昔の裡には種々なる面白き趣味の含まれて居るものである、過去明治廿五年以前より遡りて同二十年前後に於ける文壇が如何であつたかと云ふ事は少しく断界に注意するものには先刻既に承知の事であるから今更めかしく該時代の歴史を語るには及ばないが當時に於ける文士の隠れたる逸事瑣聞など尠くはない是等を今より考ふればナカ／＼に又興なさに非ずであるから聊か當時の見聞を紹介しやうと思ふのである

鐵腸居士の出版策

はしがき

題して茶受談話と云ふ、素より間食の讀物、餘暇の徒然、退屈基きに過ぎないが、又その裡には何等かの趣味の存するは著者自身に請合ふのである、別段事々しく箔を添へて勸め込むのではない、有體に言へば予が嘗て新聞紙上に掲げて世に味はつて貰つたものを他の勸めに依て茲に再び諸君の前に現はし出したのである

明治三十六年五月

内田茂文



故末廣鐵腸居士が著した政治小説『雪中梅』は出版以前からして非常な噂であつて今に出るか／＼と讀書社會をして待ち焦れしめたが出版するに當つて居士は故更に同書に版權を取らなかつた而して出版になつた曉は非常な景氣で『雪中梅』を讀まなければ殆んど讀書家の耻とした位であつて、本を買つて讀む事の出來ぬ貧書生等は貸本で讀むと云ふ始末、その貸本すら借客が支へて一週間も前から注文しなければならぬ有様であつた、斯様に非常な喝采を博した書に版權が無いのであるから是れ幸ひと阪地の某狡猾な書肆は得たり賢しと云ふ見脈で直ちに同書の僞版を拵えた、勿論正眞のよりは總てが疎製ではあるが本文に於ては變りはない、此僞版が一冊七錢か八錢で大道の夜居に轉がつて居る有様であるから是迄貸本などにて辛うじて讀んで居つた者又は未だ讀まなかつた者は争うて僞版の雪中梅を買つて讀んだから狡猾書肆は思ふ壺にて果して金儲

けをした、所が『雪中梅』は前編だけ出版に成て惜しい處で切り残し後談は後編の『花間鶯』に譲つてあるから『雪中梅』を讀だものは孰れも後編の出るのを待兼ねた、僞版書肆も亦金儲けせんと讀書家と同様に『花間鶯』の出版を狙つて居つたが愈々後編の『花間鶯』が出版に成つて見ると該書にはチャンと版權が取つて有つて狡猾書肆は僞版をする事が出來なかつた、随つて前編の僞版で賣り込であるから後編の注文が續々あつても本元へ仕入なければ賣る事が出來ない、鐵腸居士は『雪中梅』が克く賣れた上にも僞版を利用してより多くの廣告をした様なもので爲めに『花間鶯』で大に利を占めたと云ふ事であつた。

假名垣魯文と娼妓幻

故假名垣魯文翁が文筆以外に性來洒脱であつた事は人の能く知つて居る所である、翁は嘗て吉原品川樓の二代盛糸の許に遊んだ事が有つたが此



二代盛糸と云ふは彼の谷豊榮と情死した初代盛糸の名を繼だ者で初代の冥福を祈るとか幽魂を吊ふとか云ふ意味で大に悟りめかし上着は燭燄次は地獄下着は阿彌陀の圖を畫た三枚の桶襦を常に製ねて居たが是等は皆魯文翁が黒幕に成つて遣らされたので、其後盛糸は根津遊廓の大松葉樓へ住替して幻と名乗つたのも翁が命名したので有つた、幻は彼の昔の江口の里の地獄太夫を氣取り魯文翁も亦一休禪師を氣取て居たのである。

風來編輯料を拘摸る

河原風來が前の改進新聞社を退いてから 貧乏の仕通しであつたが漸くの事で書肆から編輯の注文を受けて本所から下谷の車阪へと移轉した其編輯と言ふのは『東京横濱獨案内』と云ふ書で、當時恰も第三内國博覽會が開設さるゝので出京する地方人に當込だ出版であつたのである、風來先生久し振りにて編輯料に有り付いて意氣揚々と編輯をして居つた

が某日書肆から編輯料の内金三十圓を受取懐中して歸宅する途中にて掏摸に取れ一方ならず當惑し夫からして快々として樂まなつたが遂々同書の出版になるや否やに没したのは氣の毒の至りであつた。

藍泉耳の垢を保存す

初め轉々堂と號し後ち柳亭の號を嗣で三世種彦と稱した、故高島藍泉は温厚な性質で非常に記憶力に富で居つて、常に自分の耳の垢が溜まれば之を把つて敢て打棄すに大切に紙に包んで仕舞て置た、夫は何故であるかと人が問へば彼は答て曰ふには「此耳の垢は他から種々なる事を聞込んだものでは是に依て我を益したものは何の位か分らない仇疎忽には出來ぬ即ち是れ我帥である」と而して彼は此耳の垢の爲めに一基の塚を建設せんとの素志にて西京邊から玩弄物の五輪の塔を買ひ求めなどした事があつた。



浪六の千住通ひ

是は近き過去七八年前即ち明治三十七八年頃であつた、小説家の茅の浦浪六が東京朝日新聞紙上に盛んに小説を書いて評判の宜かつた頃、彼は向島の白髯附近に住居をして居つたが折々綾瀬の堤傳ひに關屋の里を経て大千住の廓へ通つた、平素遊ぶ廓といふのは同廓の越州樓である、敵娼は小春と言って同樓では随分と賣つ妓であつた、で浪六先生と小春との交情はナカ／＼の熱度で小春は常に朋輩娼妓に羨まれる位であつた、浪六は本名を名乗らず丹後梅三郎と云つて居つた、處がこの小春の許へ繁々通ふ客で西荒井邊の僧侶があつた彼は勢ひ該僧と鞘常筋に成つて居つたが彼が嘗て書た何とやら言ふ小説に暗に此一件を仄めかして作り込込事があつた。

因みに言ふ、其當時越州樓の書記に堀某と言ふ男があつたが斯る社會

に飯を喰て居る者に似合す文藝に熱心で常に當時の文士と交際して居つて浪六と小春との消息はこの堀某が常に話したが堀も今は世に亡人となつた。

服部撫松の雑誌談

曩に『東京新繁昌記』を著はし後ら『東京新誌』を編輯して一時は當時に名聲を知られた撫松居士服部誠一が同新誌廢刊後『京華春報』と云ふ雑誌を編輯して居つた其頃彼は折々同雑誌の金主であつた京橋區南旗町の富田辯護士の宅へ行つたが彼は嘗て同家の書生等に語つて曰く「新たに雑誌を發行するのは恰も藝妓買をすると同じ事で一度や二度で氣心の知れぬ妓を靡き随はす譯には行かぬと一般で雑誌も一號や二號や三號では中々得意客を釣り込む事が出来ぬ」と通がつた氣焰を吐いた。

編輯局に吸子の酒を置く



現今は狂句の判者と成り澄して九世柄井川柳と名乗り居る前島和橋は明治十五六年より十八九年時代には小新聞の記者であつたが彼は性來大の好酒家で、編輯局に在つても彼のテーブルの上には常に吸子と茶碗とが備へ附けて在つた、一寸見れば茶にても有る様で少しも不思議はないが何ぞ圖らん吸子の中には酒が這入つて居るのであつて和橋先生退屈になると時々手酌でグイ／＼と得意に遣て居つた。

八犬傳の暗誦

伊東橋塘と云へば二タ昔ほど以前の文壇には尠からず聞えたもので有つたが彼が當時の小新聞に記者であつた中で有喜世新聞（後に開花新聞となり又改進新聞と改名す）に筆を執て居つた時が一番彼の得意なる全盛期であつた、其頃には彼の名聲を慕うて門人たらんことを乞ふものも有つたが彼は是等のものに初對面の挨拶には必ず斯う言ふた「何でも小説

家にならうと思へば八犬傳中の名文くらゐは常に暗誦して居る様でなければ宜なS.J.H.O.

青萍と學海との衝突

去る廿二三年の頃であつた神田萬世橋の傍に萬代軒と云ふ西洋料理店があつた該處で毎月文學會が開かれたが當時の名ある文士は尠からず集まりて種々文學上の興味ある談話があつた或時の會に依田學海居士が源氏物語の文法に就て演説し大に同書を稱賛したが其演説の終るや同席の末松青萍博士が顯はれて自分は源氏物語を英文に譯した時同書の瑕瑾を見出したとして少しく學海居士の説に論鋒を向けたゆゑ端なく茲に兩氏の衝突を來たしたも結局は一場の笑ひ話に終つたが此事は當時文界の一談柄であつた。

鐵腸博奕の事を木堂に問ふ



末廣鐵腸居士が『花間鶯』と云ふ小説を著はす時篇中に博奕の事を書くに臨んで先生少しも井道を御存じなき故其だ困り友人等に問合せたが友人の言ふには犬養木堂に聞くが宜いとこの事に先生早速同氏に就て聞き取り書たと云ふ事であつた。

總生寛の落書

天保仙人、七杉子、竹天子などと別號して當時の文藝雜誌、新聞紙に知られた總生寛は嘗て某年の年始に假名垣魯文翁の居を訪ふたるに生憎翁は不在であつたから遠慮なく奥へ通り翁の一室なる戸棚に逆の書を描きたる戸へ筆を添へて數莖を添ゆるものは天保山人總生寛と云ふ數語を記して歸つたが翁は歸宅して此有様を見て心中大に喜ばず其月發行の芳譚雜誌へ『落書始』と云ふ一篇を草して皮肉な筆法で總生を賞擽つた。

原稿紛失の分疏

明治十七八年頃まで發行を繼續して居つた『風雅新誌』といふ唐紙摺り四六版の雜誌があつた、其社長は山田風外と云ふ男で當時の雅人文士杯の寄書を澤山に登載して一寸讀むべき小冊であつた、同雜誌を岡野維平(故淺草庵)が編輯して居る頃であつたが、其頃の寄書家で人に知られて居つた中阪まとき(本名中川眞節)の原稿を同社で圖らず紛失させたが、同社にては中阪に對する其言譯が面白い、先生の玉稿は謹んで机の抽斗に秘藏し置いた處が文に神あつて何時の間にか何れか飛出し其所在が知れぬ故何分悪しからずと云ふ主意で紙上に社告したのは頗る妙で中阪も笑つて立腹する譯にも行かなかつた。

淫書を歴史と誤認す

是は少しく憚る處があるから詳らかに言ふ事は出来ぬが、或筋に於て義太夫院本を夥だしく買込んだ事があつた、而して一々書名の目錄を製し



て索引に便にする爲め取調べたが、尤も院本ばかりではなく他種の雑書も多々ある事ゆゑ、内容を仔細に窺はずに唯その標題に依て索引を作つた處が『長枕褥合戦』と云ふ院本が歴史書類の中に紛れ込んだ、該書は御存の人もあるで在うが彼の福内鬼外と名乗つて風來山人作の淨瑠璃丸本であつてこの内容は實に讀むに堪へない淫猥のものである、勿論その標題に合戦と云ふ文字が有る事だから中を見ずに歴史ものと早合點したのも敢て無理ではないが随分匆々かしい話だ、是を某氏が見出して注意したから驚いて同書を歴史書中から撤去して大笑ひな事であつた、此當時であるから一場の笑ひ事で済んだが現代ならば逆も一笑には附し去られない、彼の教科書の「四ツ目屋事件」と同一様の性質事件だから當局者は必や責任問題だとか八釜しい事に立至るやも知れぬのであつた

浮 世 模 様

貸本の趨勢 附 撰本之事

貸本屋といふ營業は面白い一種の商法で其營業の状況例へば得意の如何に依り大に時好の潮勢、人心の傾向を窺ひ得る事が出来るものである、東京廣き十五区内には中々貸本屋の數も多く有るで有うが、今予が知て居る外神田の某貸本屋に就て聞くに目下は貸本の種類中何云物か一番讀者が多いかと言へば先以て探偵小説である、次は復讐物、次は俠客物であつて、春陽堂博文館ものは殆んど書生の一部分に限られて居る、けれども其内にも弦齋もの紅葉ものは多く婦人が嗜み露伴もの浪六ものは男子に好かれて居る、又海底旅行とが月世界旅行とかいふ物は目下全然讀者が無いそうだ。



一寸種類の方面を別て見れば

探偵小説………職工四分 商人、婦人六分

復讐物語………職工

俠客物………職工六分 商人、婦人四分

春陽堂物………學生

先斯いふ有様である、是に依て見れば所謂伊達を街ふといふ意氣より職工社會に俠客的物の愛讀されて居るのは自然の勢で確かに其人心の傾向を窺はるゝのである紅葉菫齋の軟的小説の婦女社會に歡迎されるゝも押して知るべきのみだ、勿論貸本屋は右等の種類に限らず尙他に幾多の種類もあるが先右の如き有様である。

現今は風紀が嚴しいから猥褻物はトント見掛ないが以前は貸本屋が極内で春書本など多く貸付た物だそうだが、彼の古い川柳にも「貸本屋何を見

せたか摸られる」といふ句があるが、是は確に其時代を穿つたものだ、此頃は探偵小説でも實説といふ方が歡迎されるのは大に時好の如何といふ處に注意するゝ點であるうと考へる。

此他在來の八犬傳、水滸傳、梅曆などいふ物は今では隱居的人に愛讀され、寧ろ有ゆる小説本も讀盡したといふ人に讀まれて居て不相變衰へぬは是れ其著作そのものゝ良からであるう。

以前は随分猥褻の讀本が行はれ勿論大びらといふ譯ではないが殆んど公然の秘密といふ様な有様で必ず貸本屋の背負て居る荷の中には五六種の春書本は有たものである然して其種類は如何なるものであるかと言へば先高尙………と言つても訝しいが餘り俗でないものは遊仙窟、肉滸團、大東閨語、春樹拆甲、色道禁秘抄、艶道通鑑、枕文庫、ゆふ禪、西鶴跡追、赤烏帽子、降つて手毎の巻、黄素妙論、通夜物語、玉の盃、好色修業、



千草の花、鎌倉土産等より在來の讀本三國誌、太功説、八犬傳等に擬した  
猥褻本に至つては中々數へ切れぬ程であつて是等は實に見るに忍びず讀  
むに堪へない物である近來大に風紀が嚴になつて居るから右の種類は殆  
んど跡を断ちて物好に陟獵求めても絶えて得る事が出来ないのは風紀上  
甚だ喜ばしい事である、然るに此頃チラ／＼と猥褻文字を諸種の出版物  
中に見當るは以ての外である、不知庵主人の破垣は予は讀た事はないが  
話しを聞けば猥褻の故を以て發刊を停止されたといふに至つては實に苦  
苦しい限りである、是れとは少しは事は違ふが、何時『楊貴妃』とか『楊太  
眞』とかいふ本が某書肆から出版になつた當時の新聞廣告に玄宗皇帝を  
股間に翻弄云々といふ文字が並べて有たには大に驚いた予は該本は讀ま  
ぬが其廣告の文字を見て充分に猥褻なるものと推定した否推定せざるを  
得ない譯だ斯る文字を並べた廣告文が公然と新聞紙面に大びらに掲げ出

さるゝに至つては予は實に怪しかる事であると思ふた演劇の脚本淨瑠理  
の文句に猥褻を注意さるゝ其筋の眼光序に右等にも宜しく注意されたい  
ものである。

理髮床の話

天窓ばかり飾してピカ／＼と光らすを昔から雪駄直しの金槌と冷評すけ  
れど今の世の天窓は虚飾よりも寧ろ衛生といふ事に就て重きを置かれて  
居るから随つて頭の手入れも衛生から割出されて居る但し婦人の頭は別  
問題として先男子の頭に就き聊か理髮床の事を話そう。  
今は措置き以前は江戸廣き四里四方の中には山の手の頭と下町邊の頭と  
多少異り朱引内と塙末とは聊か髪風の風も違つて居た殊に江戸中尤も伊達  
を銜ふといふ淺草では其當時清元銀杏、藏前天窓などの甚だ流行した事  
は五十以上の老人方は能く御存じである、今は區に依て差異はなく日本



橋でもバリカンを使へば四ツ谷の果でも機械刈の音が聞える、神田で香水を灑げば高輪の末でも匂ひをさせると云ふ有様で流行頭は一般である現時流行して居る重なる風を數へて見れば。

▲米利堅風……是は揉上げまで剃附け周囲を大ぶりとしたるもの▲スパンクル……是は多く西洋人向きなり▲ポー……是は奇麗に前を分けたるもの▲セントルカット……是は前より後ろまで割通したるなり先大いに異つた所は此位で此他に澤山ある想だが大概は似たり寄たり者の別段言ふ程でもない器械刈即ちバリカン刈といふは五分刈三分刈一分刈甚だしきは五厘一厘などいふ好みもあるが夫等は多く夏向にて冬は大低短かくて一分刈是にも亦好みがあつて周囲を一分に上を三分とか五分とか種々なる好みのある中に彼等理髮床の最も困るのは「眺めの頭」と稱してバリカン使用すの鉄刈りと云ふのである是は一寸男ツ振りを能く

見せる丈それ丈念が入つて手数が要る床屋困らせの贅澤頭である随つて直段も比較的高い。

此ナガメの頭と言ふのは髪を長めに刈込むからとの説もある。然して理髮床の困るのはナガメの頭ばかりでなく僧侶の頭……即ち丸坊主に剃るのも甚だ割損の仕事で刈込みの客の突掛け立込んで来た時分には僧侶天窓を持ち込まれるのは頗る閉口の至りで一錢位添へて謝絶たい位なものだ想だ、此坊主頭は器械刈から見ると恐ろしく手数の掛るものでイヤ剃刀を合せるとか天窓を濕すとか割に合たものでない想だから諸君金を掛けて床屋へ厭がられに行の氣が利かないから忘れても坊主頭には成り玉ふな。

夫から床屋に出仕事といふのがあるコハ最も贅澤仕事であつて自宅に居て理髮師を招き、居ながら頭を刈るのだから贅澤には違ひない是等は夫



抵上回五十錢若くは一圓位である、併し此高價の刈込賃を貰つた處で床屋の方では割に合ぬもので此仕事に出て居る間には幾客の頭を刈込まれるか知れぬのであるから、尙且にイヤ弟子では不宜い親方に來て呉れるなど贅を並べる向きもある、然であるから此出仕事と云ふものは昔しは床屋が一日中の手間賃を取るものとして定めてあつたのである。

盜賊演劇

人には嗜好といふ一ツの弱點が有つて此弱點に乗せられ附込まるゝに於ては最早事の是非を問ふの暇はない、夫の時流を追ひ時好に投ずると云ふのも即ち此弱點と云ふ世の中の嗜好に投ずるのであつて俗に所謂る如才なきと云ふものだ、然して此時流を追ひ嗜好に投じ世人の意を迎ふるに尤も熱心に努むるものは何であるかと言へば演劇である、芝居ほど社會の氣受に投せんと計る事の甚だしいものはない、それで有るから演劇

の狂言に依て社會が如何なる事を好むやと云ふ嗜好の程度を窺ふ事が出来る。

予は試みに三十四年度の春芝居に就て一寸考へて見たるに興行狂言の半分は殆んど相撲と盜賊とで持ち切られて居る、勿論春は本場所の相撲が有る所から人氣の是に向くを圖りて毎年相撲に關する狂言の出ない事はないが是れ即ち社會の嗜好といふ弱點に投じたものではあるまいか、然らば盜賊の狂言が流行するのは果して社會が盜賊を好むと云ふかと言へば是は頗る一考すべき問題であるが、兎に角泥棒狂言が人の氣受よく繁昌するを見れば是れ確かに社會の嗜好に投じたもので取りも直さず世人の弱點である。

勸善懲惡と云へる事を唯一の小楯に探て辯護する演劇が盜賊狂言で無ければならぬ事もあるまひに然りとせば世人の氣受よき社會の泥棒好きに



は轉た歎息の外はない。

世々の流行唄

昔からの譬へに唄は世に連れ、世は唄に連れりと云ふが如何にも然である、彼の「金チットン貸てんかチトチットン、チットン」の流行た時は世上一般非常に金融逼迫した「暴々一番薩天下」を唄ひ出して間もなく南西の戦争が起つた「呼べと叫べと戻りやせん放海」節が唄はれて畝傍艦の行衛知れずとなり「異見しやんせ〜滅法矢鱈に意見しやんせ」は辭職勧告の流行を來し、「そつと出しやドンガラカン」は昔て國庫の缺乏を告げた時で有た「ヘラ〜ヘツたら〜ラ〜」は紙幣の盛んに出來るを豫言し「うんとこドッコイ惣助さん」は紳士紳商に藝妓を引ず者が頻りに在つた當時の唄だ「ヤツつける」の壯士節が流行て忽ち東學黨の變から延いて日清戦争となつた「チャ〜ラカちやんのメツチャ

〜」節は支那が滅茶々に敗北した豫言で在つたと云ふ様な嘲梅で世に連れる流行唄も中々に争はれぬものである。

義太夫と學生

近來の學生が墮落の極度に達したる事は、日々諸新聞紙の三面記事を見ても知られる、吉原洲崎等の廓種が十の六までは學生に關係を持つて居るものである、而して其記事が無理と合意とを問はず情死事件であれば更に學生が大部分を占めて居る、尙これを一夕の寄席に徴して見れば更に大々的に墮落を白狀して居るといふ事が解る、試みに一寸書て見やう。

女義太夫席に於けるドウスル連といへば、十中の八九までは學生である勿論他分子も、聊か混じ居るとした所で、土曜日、日曜日の晩といへば、言ふまでもなく、ドウスル連の當込みにて學生が九分を占めて居る、而



して又出方の太夫の方でも、書き入れの晩であるから、日曜の出し物、旗日の出し物など、語物が客を釣出しの餌的に、内々定つて居る、それであるからして、客の来る語物は、ピラが利くと言つて、日曜、土曜などは、殊に學生向き、ドウスル連向きの語物を撰ぶ事であるのだ、その物は如何な物であるかと言へば、先こんなものだ

語物外題

演藝度数

- 太閤記尼ヶ崎 一五
- 辨慶上使 一五
- 蝶花形八ッ目 一五
- 朝顔日記宿屋 一四
- 野崎村 一四
- 日吉丸三段目 一三

合邦住家

- 三勝半七酒屋 一三
- 壺坂寺 一三
- 阿波の鳴戸 一二
- 菅原寺子屋 一一
- 本藏下屋敷 一一
- 昔八丈鈴ヶ森 一一
- 安達原三段目 一一
- 紙治炬燵 一一

此表は最近一ヶ月土曜、日曜の兩夜合計九晩の統計である、尤も演藝十回以下のものは、省いた處で斯の如しだ、この語物は、何れもドウスル連向き、學生好みといふものである故、彼等は喜んで、此の物語を迎へ



る、而して此語物は三四を除くの外、大抵戀情、痴情に係る曲であることを以ても、殆んど學生の意向を量り知るに難からぬ譯である、此等の讀物に反して、極々眞面目な曲を出せばトント喜ばない、その喜ばないものは、客足の減少といふ恐慌を來たす基であるから、所謂ビラが利かぬと稱して成るべく前表の如き語物を繰返すに至るといふ始末だ、去りとは社會風教の爲めばかりでなく、義太夫曲の爲にも、又歎はしい次第である。

夜舖の糶賣商人

水天宮と言はず金比羅と言はず五十稻荷、二七不動、清正公、摩利支天、毘沙門、薬師等山の手場末の嫌ひなく縁日といふ縁日には何處にも見掛ける口上商人中近來一と際目立つものは糶賣といふ高張二挺を立て、盛に晒り立つる彼の糶賣屋である。

一間高く積み累ねたる荷物の上に立ちて仰ぎ見る數多の公衆客を眼下に

見下し辨舌爽やかに立板に水を流す汗さへ拭ひも敢へぬ大氣燄の功能、

「サア諸君御覽なさい是は舶來本チルのシャツ舶來にも色々ある勿ね物、  
瞞物の類にあらず此通り獅子印の中にX エンドコーと記して有升は  
即ち米國のエツキス會社の製造で有りました上等といふベストの印がム

います、サア誰殿でも口を切て下さい、エ何です五十銭……エ五十銭……

……五十五銭……六十銭……六十五銭……六十五銭……六十五銭では如

何にしても賣切れません、勸工場の正札でも御承知でムいませう何處へ

行たつて八十銭より廉い品ではムいません尤も此品が横濱へ輸入の當時

一枚九十銭ばで飛で行きまして廉いからつて東京の洋物商人中には百ダ

ース二百ダースも買込だ位な品六十五銭で賣放しては寐覺が悪い營業眞

利もムいませすからモウ少しお買下さいモウ一言で負け升、エ六十五銭……

……六十五銭……六十五銭では實に涙が溢れます、六十五銭……



先づ斯の如き調子で面白おかしく巧みに買付くる一種の愛興商人である。此種の商人は大抵本所のモリソン會社、品川の後藤會社若しくは千住の製絨會社の製造品を買出す者であつて多くはハチ物と稱し、キズ物尺たらず杯の店賣にならない品物である是等商人は一時間に二圓の商を爲し得る者を以て普通とし其以上を商ふ者は彼等仲間中の敏腕家である。

鐵道馬車吟

京橋より萬世橋に到る鐵道馬車の進行時間は三十分を消費す此間人生の哀樂喜愁、浮世の浮世たる所以を感じた。

肥るへき馬さへ瘦せて秋深し

開園の案内、開花の披露、廣告に花を飾る賑やかさは車窓をも覆はれ計り

菊いろく馬車にも花の咲配り

辛うじて吊し革を握る老人に茲處へお掛けなさいとて席を譲る奇特な若者がある

竹の實に直な心の見ゆるかな

俄かに尻を持ち上げらるゝと思ふ間もなく車響は異聲を發して馬車は脱線した

波揺れに千鳥揃うて立ちにけり

十七八の美人進行中に乗うとした車掌は慌て、ベルを鳴して馬車を止め心切に美人の手を把りて乗込ました、然り誠に心切に世話を焼いた

袖垣を便りや萩の覺束な

「オヤ美いちやん暫くネ何方へ……」と車中久々の出會がある

菊の客櫻以來の顔合はせ

込合ますから懐中物を御用心と言はれた時は既に遅し乗客中に墓口を



拘摸れし田舎漢があつた

雲足の極めて逸し野分跡

車掌曰く今お一人は掛けられます貴君お荷物は膝の上へ願ひます

つらなるや羽色毛色の違ふ雁

萬世橋にて客の多くは下車し残るは予と美人一人のみ

残月に覗き込まれぬ朝寝顔

昔の力士谷風棍之助

現今相撲の勃興は非常なものであるが、今の力士は昔の力士に比してトント趣味に乏しく關と言はるゝ地位の者ほど夫程放蕩が強くソレ待合だソレ藝妓だど全然質問同様である者も尠くはない然云ふ側の者よりは昔の事を書た方が遙に興味が有ふと思はれる。

谷風棍之助と云へば演劇にまで脚色れた有名な力士で明和、安永、天明、寛政の年間を盛んに経過した關取、寛永元年の相撲番附二段目の五枚目にある谷風棍之助と云ふ同名の力士は茲に云ふ谷風棍之助とは別力士である谷風は身の丈六尺三寸體量四十五貫目あつて横綱代々の中にも類ひ稀なる好力士であつた事は好角家は能く知る所である、この谷風が本業の相撲以外に風雅の心掛けの有つたは實に感ずべき事で、常に和歌など研究し手跡も亦拙くはなかつた、谷風の生國は奥州仙臺で寛延三年に生れ寛政七年正月の九日に流行感冒に罹り四十六歳を二期として没した。

雷 電 爲 右 衛 門

雷電と名乗る力士は歴代中に幾人も有ります、數へて見れば、



寛永年間關脇

雷電龍右衛門 (大阪)

同幕下三枚目

雷電源太夫 (津)

明和年間西前頭二枚目

雷電爲五郎 (雲州)

寛政年間東前頭三枚目

雷電灘之助 (明石)

是だけである其内の爲五郎と云ふのが彼の有名な雷電爲右衛門の事だ、  
爲右衛門は元來信州北佐久郡小諸の出生で雲州侯に抱へられた者だ、夫  
ゆる番附には雲州と成て居るが、今も信州の小諸町には佐久間象山の撰  
文で立派な碑が建て居る、雷電爲右衛門は寛政六年の番附では西の關脇  
まで進み陣幕と顔を合せて負を取つたが此時「今年や負けても雷電は勝  
など、云ふ落首を誑はたれ事は古老の能く語る所である、この雷電の墓、  
赤坂一ツ木の笑柳山報士寺 (眞宗) に在ります、墓石の表面には左の文  
字が彫り付て有る、

雲州

雷電爲右衛門

行年五十九才

文政八乙酉年二月十一日

雷聲院釋關高爲輪居士

聲竟院釋妙關爲德信女

文政十丁亥正月廿日

妻八重

行年六十一才

好角家は散策の序にでも尋ねるも一興であらう。

小野川喜三郎

小野川は初め相摸川と名乗り、後ち先代小野川の弟子に成て二代目小野  
川才助となつたもの、安永、天明、寛政の年間を盛に経過した力士で享  
和年間には既に廢業して文化三年に没した、慶應頃の番附に東の關脇に  
小野川才助と云ふのが有るが是は別人で三代目にでも成るのであらう、



小野川喜三郎の事蹟は「相撲今昔物語」其の他諸書にも散見して誰でも能く知つて居れば事々しく書く必要ないから省くが同力士の墓に就て聊か記そうと思ふ小野川の墓は芝公園の池徳院に在る同院は目下無住職で同公園の天陽院で兼務して居ると云ふ事である天陽院の住職笠原氏に就て聞けば同氏は心切に案内の勞を把られ是が小野川の墓ですと云ふ物を見れば、高さ尺餘の臺石に二尺餘りの掉石が建つて碑の正面には左の文字が刻してある、

文化三丙寅三月十三日

顯樹院本光覺現居士

先祖代々位

瑞顯童子

文化三丙寅正月二十日

右の側面には「本還院覺月丁貞大姉文化四年正月二十日」と刻してある、又臺石には「川村氏」の三大字が刻してある、この文化三年の三月に没して居る顯樹院本光覺現居士と云ふものが小野川と言ふ事だ側面に刻してある本還院と云ふのは小野川の妻であらう、池徳院と云ふ寺は元來久留米の藩主有馬氏の宿坊であつて小野川は有馬の抱え力士であるから此寺に葬つたものと思はれる、去にても有名な力士で有ながら今は線香一本手向る者だになく荒廢に任せて無縁に屬し居るは實に遺憾千萬である、殊に現今相撲の隆盛なるにも拘らず、此小野川の墳墓を願る者のないのは情けない次第である。

藝苑茶話

故竹本綾翁



久しく義太夫界の泰斗と仰がれて居つた竹本綾瀬太夫は、晩年綾翁と改名し老て益々壯者も及ばぬ元氣であつたが、去る三十四年九月二日肺炎加答兒の爲めに遂に六十九歳を一期として没した、予は往年義太夫雜誌を編輯して居つた頃より翁とは知り合であつた、今は早や昔話しとなつた翁の藝談を聊か紹介しやう。

生活の都合上且つは諸方への足場よきよりして藝人の住居多き真砂の濱町、明治座の芝居茶屋と並びて紅塵ふかき中に澄した閑静の塀の内が即ち故竹本綾翁（前名の綾瀬太夫）の住居であつた、拭き込みて寂ある格子に先その時代語りの程思はれて重さを置く、の心地がした翁は天保四年大阪堂島に生れ當年とつて六十八歳（予の訪ひしは）而も嬰鑠として年少き後進に伍し下町と言はず場末と言はず、寄席の高座に毎夜巧妙の演藝、熱心の程壯者の及ぶ所でない、演じ来る曲、精妙神に入り古への長門、

春太夫の昔をも偲ぶ面影がある様に思はれたが、如何せん時の流行は舌甘るき女義太夫の妖艶かしさを追ふの世の中、意に満たぬ絃手を相手に其門に出でし相生太夫一座を助けて先頃よりの出席に、十二錢の木戸錢高價にあらすと聽客の取沙汰であつた。

技藝に精緻熱心な菊五郎が當時歌舞伎座の二番目狂言に「紙治」を演ずるに就て其科に就き翁を自宅に引て種々問ふ所があつた。

翁が其二階座敷に門人を稽古するは毎日午前の内十二時前後には残りおく稽古を畢るのである翁は機好しとて喜びて、座も換へず稽古の室で談は先その「紙治」に始まつた。

「全體「紙治」といふ曲は現今寄席で語る様な風に遣るものではないません、本筋に語つた日には今の風とは全然異います今語つて居る治兵衛は「そりやマア何を言やるぞへ（翁は殊更に今風に語り）斯な鹽



梅に餘り沈着すぎます、前段の茶屋場から考へても彼なに沈着た治兵衛では有ません、書置になつてから「おさんが尼に成た」と（今風に語り）泣き噪いで丸で發狂じみた語り方です、モウ茲に至つちや治兵衛はポーツとして仕舞て居るのです「エッおさんが尼に……おさんさんが尼にならしやんして妾しや何とせふぞいの」茲所謂本筋に語り）と小春の突込を受けて「デモおさんが尼に成つたといの」斯いふ風に演らなければ本筋では有ますまい、夫を始めから泣聲出して治兵衛が噪き廻つた日には趣きも味も有ません、

談味次第に興を増して氣焰もまた随ツて昂り來た翁は尙語を次ぎて、

「舅の五左衛門も「治兵衛殿お宿にか」態と今風に擬し）何だか大小でも帶して居るかの様な言葉つきで丁度侍の隠居でもゐる様な工合にやります、一體は其様なものじや有ません、根が町人で、それに夫

世話場ですから「サア手短におさんに隙やりや」コンナで行のじやない」何にも言ふ事聞く事アあいわい」所謂本筋に語りて）斯な工合に少しジンザイに軽く演らなければ嘘です、

談、ますます佳境に入る、

「過般 音羽屋から這回歌舞伎座の二番目に「紙治」を演すに就て型を承知したいと云ふので私を呼に寄越しましたから一晩寄席を休席で菊五郎の宅へ行って、私が若い時分先輩の名人から習つた「紙治を」語つて聴かせました、尤も現今の風とはスツカリ異つて居ります。

「私しが音羽屋の宅で「紙治」を語りました其後、或人が綾瀬の語つたのは本筋の紙治ではあらうが、現今風のも聴て見なければ不宣いと勧めたので音羽屋は早速相生太夫を三州屋へ呼で「紙治」を語らせて聴きました、所が相生には現今流行る例の寄席で語るのですから、私



のとは大層遠つて居ります、からして音羽屋は又私しを呼に來ました故、行きました所がモ一度語つて呉れといふのですが、此間も語つたんだから、ソウ幾度も語るの止して、私は、音羽屋に貴君が治兵衛で私が小春に成て二人で演たら宜ございませう、私が小春で「お三さんが尼にならしやんして妾や何とせふぞいな」と突込みますから、此氣合を治兵衛は受て演たら宜でせうと言んです、尤も此時には秀蘭も福助も八百藏も來て居りました這回は音羽屋も如何いふ鹽梅に演りますか、元來器用な人ですから不宣くはありますまい、談は茲に一段落を告げた、更に轉じて目下寄席に於る斯藝の腐敗に及び時勢の變遷を歎じ人形劇の衰頽を慨するなど綾翁なかく盛んなものであつた。

他種の藝人は暫らく措き義太夫社界の藝人はど無學不風流なるもの、多

きはない、和歌も俳句も狂句も都々逸も混同して解らぬが常なるにも拘らず、此點に於て翁は克く古人の吟詠を記憶し、藝外の雅談なかくに聽べきものが有る、其稽古室の床には批把園士朗が短冊「花咲いて梅折らぬ日はなかりけり」の一句を題した一軸が掛けてあつた尙翁は近松門左衛門の手蹟をも藏したるが何へか貸失つたとて歎じた、

「イヤ風流と申せば今の義太夫を稽古する素人衆は風流といふものは有りません未だ大阪には随分風流な素人もいます私しが若い折、鴻の池へ呼れて参ります時分に鴻の池の旦那も頻りと義太夫を稽古して居るんで、或時吃の又平を語られたが此時聽客への御馳走は重箱に焼豆腐の煮染といふんですがナント外題を當籤めて疑つた物じやないませんか、斯いふ風流氣は東京には有ません温習會が終ると酒でも飲でブウ〜いふのが落です、



素人義太夫輩、此語を聞いて果して如何の感あるか、翁は尙ほ鴻の池の談を續け、

「此頃追々と紳士方が義太夫の稽古を爲さいます、昔でも随分上流の人も遣つたものです、彼の雲州の不味公が鴻の池へ寄越された手紙が鴻の池に有りますが其手紙には予も先頃から淨瑠璃を始めて居るがなかく面白くも故其方も是から始めるがよいと云ふ様な事が書て有ります、不味公は御承知の大風流人で、斯云ふ人も好んで義太夫を演つたものと見へます、藝談雅話滾々として盡くるの期がなかつたが杜辰も早や午後三時を過ぎ翁が寄席出勤の時刻通りたから止むなく尙後日を期して別れたが今より思へば翁との逢ひ納めであつた。」

竹 本 東 猿

東京の女義太夫と言へば何人も先づ竹本小清を第一に呼び上げ次で小政、素行、あるを知つて彼等以外に老熟なる竹本東猿あるを知らざるものが多い是れは東猿が東都に在住する事が未だ浅いからでもあるが而も其技藝の老熟俊秀なるに於ては小清と其孰れかを斷評するに躊躇するものである其齡の若くないのと其貌の艶ならぬのとは所謂ドウナル連の人氣を買ひ得ざる所以で其買ひ得ざる所以のもの蓋し彼れ東猿の價値の存する所である。

京橋區新富町一丁目の川岸、下行く船を窓より瞰下しぬる眞福寺橋の袂に瀟洒とした格子造りの二階建ち竹本東猿、銘打ちし瓦斯燈を掲げた家が彼目下の住居で晝間は稽古の三味線の音川水に響きて家の外までも聞



ゆるが何となく床しい予の訪づれたのは午前十二時頃早や門人の朝稽古は終つたと覺しく彼は四疊半の長火鉢に依りつゝあつた、頭髪は小形の銀杏返しに結び黄勝ち堅綿の銘仙に同じ柄の羽織を重ねて居た、話は先づ義太夫界の昨今から開かれた。

「三四年前とはお客さんが大分變つて参りました」としきりの様に亂暴なお客は動なくなりました……語り物は餘り以前と違ひませぬ矢張り看版の利くのは「酒屋」だとか「柳」だとかいふ者でお客も喜びやはります……ドウヌル連だすか動くはなりましたが有る事は有ります此頃でも私しどもの席へ每晚二十人計りは來ます……けれど樂屋へは動しても這入りませぬ規則が入釜しいからでも有ります、夫は感心だす其變り果ると木戸の處に待て居て口語りや若い者が歸る後からワア〜言て御苦勞に送て呉やはります。

彼は火鉢の灰を掻きならしあがら尙語を次ぎて、

「語り物も何か變つて珍らしいものを演て見度いと思ひましてもピラが利ぬとか看牌が利かぬとかで矢張り前方から出し來つたものばかり演て居ります其方が又妙に受けます、畢竟お客が文句を能う知つて居るものが宜のだす……エ壺坂だすか、壺坂はお蔭で請け升が、ホントウに聞て呉りやはりますお客は少うムります席亭さんからの好みだすか、別段お好みといふては有りませませんが、本郷の若竹（寄席）さんは折々好みを出しやはります、彼は語りしもの、千篇一律的なを詮方なしと諦らめ聽客の尙未だ幼稚なるを欺するかの如く、

一と頃は變つたものを出せ〜と言はれまして「四天王寺伽藍鏡」の甚五郎の内や「佐倉の曙」の宗五郎拷問などを出しましたが興味に聞



て下さるお客さんはホンの僅で今申す通り耳馴れた「酒屋」や「柳」の  
方が席亭もお客も氣に入つて居ます……初日の出物ですか、初日は昔  
原を語ります、

藝人は概して派手を好むが常であれど彼は寧ろ質素な方で殊に謙遜家で  
あるから好んで自今から藝談を試むる事に至つて尠いが談是れに及んで彼  
は自分の演藝に就ての實踐を語るに至つた、

「私も澤山稽古しました中で一番骨の折れましたのはアノ「壺坂」だ  
ず彼ほど困つた苦んだ物は有りやしまへん、ナニセ貴君彼の一段に半  
年も掛りましたがな……エイ明治十九年の十月から始めまして翌年の  
四月まで掛りました……師匠は三味線弾きの鶴澤仙舟はんだす、夫で  
半年も掛つて漸と稻荷の席で半分語つたんだすせ……然だすナア壺坂  
の中で一番六ヶしい所は茲だす」そう一心の据つた上は御佛の枯たる

木にも花が咲く……とやら見へぬ此目は枯れたる木、マアどうぞして  
花が咲かしたいナア……と云ふた所で罪の深い此身の上、せめて  
未來イヤサア女房ども手をひいて一たもイザいざと「茲だす是  
には實に困り切りました、其澤市の盲目の情が語れませんのだす幾ら  
語ても師匠からは工合が悪い……いかながナと言はれるのだす困りま  
したナア夫から貴君琴の師匠を仕て居る盲の法師はんの處に琴を習ひ  
に行きました、ナニ貴君琴は私し小供の時に習ふたゆゑ覺たくは無い  
けれど盲の法師はんの詞が如何な工合や知らんと夫が覺えたさに行た  
んだす、

談漸く佳境に入り來つた彼は汲置き茶を飲み乍ら熱心に語を次ぎ、  
「一体法師はんと云ふものは太い大きい聲だす調子が何となく變つて  
居ります斯いにしては（俯く振りをして）言ひまへん屹度仰いて人の



方へ向ひ言ますちよつと斯いふ工合だす、  
彼は態と盲人の調子で盲人の語調に二三の例として言ふ處宛然たる盲人  
である若し夫れ襖を隔て、是を聞たならば正に是れ一個の澤市であらう  
彼は尙も壺坂に就て談を續け、

「十年程も師匠の傍に居りませんし東京へ来てからも餘ッ程崩れまし  
たが一生懸命にあつて稽古しましたお蔭で阪地で壺坂を出しました時  
は屹度百のお客は違ひました而して内輪の人達も賞めて呉りやはりま  
して聞て呉れました南地の澤の席で語ります時分には毎日盲人さんが  
七八人位は前通りの方へ屹度座つて居りました……師匠によつて多少  
語り方も違ひますが私は奥の奥のアノ「はんに思へば此身ほど果  
敢ない者が有るかいな」からの口説はズン／＼急いで語つて仕舞ます  
……観音さまの聲だすか、アれは矢張り上から言ふたら宜やると思ひ

ます然だす普通の人間の聲とも少しは違ひますやろシトヤカに細く明  
瞭とやつたら宜のだす、  
語り振りに就ての談稍々了らうとして彼は又壺坂に於ける修業當時の熱  
心を語るらく、

「私の持つてます壺坂の本は生島太夫さんに頼んで貰ひまして七五三  
太夫さんの本を借りまして一晩の裡に……貴君夜通しに一生懸命に寫  
したんだす、夫から丁度その後四冊ほど寫しましたが一冊は肥前の義  
太夫好のお客さんが持てくれました此お客はエライ義太夫好で私しを  
贖負にして呉りはりました、

談是より壺坂を去つて他に移らうとした彼は尙幼稚の修業當時を回顧せ  
しが如くに、

「私も幼い時だしたが其のお客が「忠臣講釋の喜内住家」のアノおり



るの書置の處「浮橋涙ながら把り上げ」われを貴君尋ねられたんだ  
浮橋とは何やら橋の名か知らんお師匠はんに聞ても大勢の弟子が居て  
面倒がつて教へて呉りやはりません夫から後で人形を見て浮橋と云ふ  
のは重太郎の妹だなど云ふ事が分り成程と思ひました、  
話頭は轉じて四方やまに及ぶと俱に時已に移つたから予は卒として彼が家  
を辭した、

彼は如上の熱心家で其高座に於ける演藝の眞率嚴格然して常に技藝は彼  
の懷中を間斷なく往來するのである會で彼は胸部の癌を切開する事があ  
つて横濱山の手の六角病院に於て手術を受けた時魔睡薬を用ゐて四十  
分間夢死の人と爲つたが其間忠臣藏四段目判官切腹の一段を語り了つたに  
は一座の醫師技手等は何れも感心しない者は無つたと云ふ事である。

### ○ 平 民 的 文 學

(所謂川柳なる狂句に就て古人の秀吟を紹介す)

俳句の平民的文學たるを知つて而して狂句所謂川柳なるもの、俳句より  
もより多くの平民的文學趣味に富むものあるを感せざるは現詩界に向つ  
て尠からず遺憾とする所なり、社會の表面裏面、宇宙の有形無形を滑稽  
の裡に寫し洒脱の餘に諷し而も僅々十有七字の外に趣味津津たるもの、  
存するに至つてや漢詩和歌、俳句の及ばざる遠きものあり、

夜學に更けて埋火も螢ほど

永き夜の修學研鑽に更闌くるまで屬精の苦埋火の螢ほどに消えなんとす  
るに於て推測に餘りあり要するに螢の一字全句の骨子、螢雪苦學の光景  
瞭々として見るべし、



寶井の水で豊に米が出来  
寶井とは俳士其角が姓なり彼が「夕立や田を見めぐりの神ならば」の一  
句に雨を呼びて旱天を救ひたるを直ちに翻轉して寶井の水とす何等洒脱  
の妙ぞ、

目がさめて着る綺柄は眠つたし

人生血氣盛なる時代に在つては總てに於て華やかに派手なるものを好む  
は未だ是れ志慮の確かならざる言はゞ處世に迷ひつゝあるものにして追  
追老境に進むに隨ひ志氣漸く定まりて派手を棄て質朴を把るに至れば血  
氣も自然と衰耗して其人寧ろ眠れるに近きものなり、是を老者壯者が扮  
装の綺に擬し來る所人生觀として誦すべく社會觀として味ふべき警句と  
いふべし、

誘ふ水茶にしてたてる茶筌髪

切髪を茶筌に結びて未亡人が亡夫に對する高潔の貞操、兎や角と世間よ  
り目惹き袖引きて戀に誘ふを冷却し去つて、超然點茶三昧に浮世を忍ぶ  
境涯寫し來つて餘す所なし、

臭い物身知らずに咲く藪柑子

臭さ身知らずと云ふ藪を把つて臭氣鼻を衝く藪柑子の所嫌はず無遠慮に  
咲彌蔓るに比す何等適切の警句ぞ、

指でさへ子は遅く寝て早く起き

凡そ物を數ふるには一ツ二ツ三ツと必ず親指より屈み寝て順次子指に至  
る而して其起るや必ず子指より起き上り始む、此理を直ちに親子の家  
庭に比喩應用せしもの、夜は老たる親を最く寝に就かしめて子は後に眠  
り朝は親よりも逸早く起きて働くこそ將さに子たるの義務なれ

二三年縫込んで置く母の慾



娘持つ母親の容姿自慢から娘の年長くるも尙肩上げを下さず小娘にして良縁を待つ世間一般の母たるもの、心情表現し得て妙、

樂みがあれば句もある雪月花

樂あれば苦ありの語を翻へして苦を同音の句の字と成して雪月花を呼ひ出したる才想、而して其雪月花に對して一吟なかるべからざる句作の如何に考案を要すべきかを潜かに言外に寓して、暗に「句」の直ちに「苦」たるべきを知らしむ、

春風は風の中での女形

春風徐々として其吹き心地よき優にやさしき肌觸りは寢之女性に扮する俳優の優姿とも見るべく其形容し來れる適切の何等盡し得たる妙味ぞ、

一人半夕立に遇ふ伊勢の馬

夕立は馬の脊を分けるてふ語に胚胎して古來伊勢路に往來したる彼の

「三本荒神」と稱する街道馬の實況を詠じたるもの、三本荒神とは馬の脊に一人兩脇に一人づつ都合三人の客を乗するものなり、一人半の起句誦し來つて自然の滑稽と云ふべし、

駕籠つれの小袖を女房あて、つぎ

言ふまでもなく是れ嫉妬の意、駕籠つれとは駕籠にて遊里に通ふ遊子が小袖の破綻、而して之を繕ふ女房のそれとなく妬心を漏らしたるもの、あての三語蓋し是れ狂句の本領、

雪も消え盡も消えて秦の關

是や歴史的狂句と云ふべき、彼の秦の始皇が書を焼き儒を穴にしたる暴慢極まる没文學の時世を詠じたるもの、文學を意味したる雪と盡の光も消滅して秦(眞)の暗夜と利屈的滑稽の傾きあれど其才想に至つては得易からざる警句なり、



雨乞も袖乞もして名を殘し

是れ亦詠史狂句の類か、小野の小町が榮枯の一期を敍し來つて面白し、雨乞小町と卒塔婆小町と其孰れも世に憎炙するに於いてや一なり、而も其間言外に寓意の潜むを見

五六反更紗に染める蓮華草

蓮華草畑の五六反……この反の字より割出して染物の反物に擬し來る奇想何等の巧案而して形容して更紗となす所、殊に蓮華草の光景を寫し盡して一段の興味あり、

其後は朝漬和尚ばかりなり

彼の博識高德なりし澤庵和尚以後又彼が如き名僧の出づるなき佛界の人物絶無を冷罵一番したるもの、澤庵に及ばざる遠き朝漬の不味なるに比す所嘲笑頗る痛快を覺ゆ、

あばら屋へいたくさし込む冬の月

月漏る賤の伏屋の光景、あばら屋へ太くさし込むの語悲慘窮狀描き得て妙、殊更に冬の月と結びて益々その寒空の慘境を寫し盡しぬ、

花嫁へ馳走痘痕の待女郎

是れ社會の配合なるものが總てに於て如斯を示せるの句、結婚の當夜待女郎の美貌なるに於ては花嫁の引立ずして甚だ興なし待女郎のアバタある醜姿は却て是れ花嫁に對する馳走なると同時に又結婚當夜の馳走と云ふべし、

辛抱は五常の道の傍示杭

辛抱のボウを棒に擬し道德の道を歩むべき途として人の履行すべき徳義倫道には辛抱といふ耐忍の目標即ち傍示杭ある事を示す是等の句は狂句と言はんよりは寧ろ教句といふこそ適當なれ、



酒戰中ばに裏返る鉢肴  
杯盤狼籍たる酒宴場裏恰も彈丸雨注の如く飛交ふ献酬の盃劇しさ酩酊の  
頃、鉢の魚は稍片身を喰ひ盡されて殘餘の片身を翻へさるゝ光景、且つ  
宴の初めに當つてや肴に箸を下さざりし上戸の漸く請太刀となりて鉢の  
肴を弄び初め酒戰中途に下戸黨に裏返る體をも連想されて興味甚だ深  
し、

大象を繋ぐ普賢の洗髮

彼の徒然草に云ふ女の黒髪をもて糾へる繩には大象をも繋ぎ止むるてふ  
語を把りて美人に擬したる普賢菩薩の象に跨れるに當倣めて愈よ古語の  
眞理を發揮し來れるもの、洗髮の二字弘く社會の女性が美貌には克く大  
象を繋ぎ得る力のある事あるをほのめかして餘りあり、

八文に成るまで世話な禿菊

由來狂句は表裏に意味なきは非ざるも此句の如きは其甚だ顯著なるもの  
なり、禿菊を苗時代より丹精して縁日の途頭に並べ出し八文の價に賣れ  
る迄は其間大に植木屋の苦心を要するもの、彼の七八歳の頃より遊廓  
に身を洗ひ豆どんとして使役さるゝ禿が一個空樓のお職を張りて道中に  
八文字を踏むに至る花魁となるに比し來つて盡し得たる句と云ふべし、  
連にして徳あり道を知つた人

此句また表裏に意味あるの顯著なるもの歩むべき方向を知れる人を道連  
れとせば頗る利益あれど然らざれば大に方針を誤るものなり、道義の何  
たるを知りて克く之を守る人と交はるに於ては妙からず其身に益する  
事あるを云ふ、暗に友は能く擇ばざるべからざるを説く、

白い齒は互ひに見せぬ公家夫婦

世俗に笑を含みて氣を許すを白い齒を見すると云ふ、古來公家なるもの



は齒を涅し染めたるより現實上公家夫婦は笑ひ巫山戯る事なく家庭正しく規律整ひ居ること其白い齒を見せぬが如けんとの意なり、

加賀で名の高い句上手舞上手

一は是れ俳女千代尼と云ひ一は是れ俳優中村歌右衛門（家號加賀屋）を云ふ、千代は俳句の巧手として歌右衛門は踊りの名人として俱に加賀の國の二個名物たるを云ふ、

頰杖をつく敷島の道づかれ

敷島の道これ和尚を云ふもの作詠に頰杖をつきて如何に考案に苦心を要するかの場合に於ける、斯の頰杖の杖より割出して敷島の道勢れの語に及ぶ即ち是れ狂句の狂句たる所以蓋し眞價は茲に存するなり、

二三間出てから夫婦連れになり

是れ新婚夫婦が相携へて外出する嬉しさと氣耻かしさとの情態を悉し得

たる句と云ふへし手を携へて我家を出るの何となく他に見らるゝの極り悪しきより夫若しくは妻の何れか先んじて別々に家を出で二三間態と後れ離れ而して後相俱に歩を同するもの克く實際を描き出しぬ、

うんと云ふ二王の方へ願をかけ

呵云の二王へ願掛けする俗物の氣迷ひから孰れへ願ひなば利益あらんかと云といふ方へとは直ちに滑稽的に承諾の意に戲解して願を掛くる俗物漢の淺猿しさを寫す狂句の妙味は蓋し茲なるべし、

すつばんの味鰻とはお月さま

非常の差ある相違を諺に月と鰻と云へるより該スツポンを利用し鰻の味に比較してお月さまと結びたるは頗る機智と云ふべく其殊更に鰻に比するは是れ常に蒲焼屋にスツポンを料理するを以ての故なり、

以上紹介したる狂句は文政以降天保に至る年間のもの間々其前後の句な



さば非ざるも多くは川柳四世五世當時に於ける斯道名家の吟に係れり初世より四世に至る間は専ら滑稽を主とし五世以降は教訓を主とせる傾きあり、現今斯道の流派傳へて九世に及ぶるも七八世より漸次拙劣となりて殆んど狂句の真髓妙味の存するもの稀なるは甚だ遺憾とする所なり、狂句は寛政年間柄井川柳なる者の創始せる所にして當時「俳風柳多留」と稱したりしが五世に至つて「柳風狂句」と改め或は「新篇柳多留」或は「教句柳樽」などと稱したる事あり、予は該狂句なるものが平民文學中の平民的文學として優に俳句の以上に偉大なる價值あるを認るものなり、

○家庭格言

庖厨肥ゆれば家産瘦せる

是は西洋の諺であつて一家を経営する上に於て種々に心を用ひねばあらぬが別て此庖厨即ち臺所向きの事は擧げて一に妻君の手に振られて居るものだが、降つても照つても毎日の事、妻君たるものは大に注意せねばならぬ徒らに贅澤三昧に耽りて山海の珍味に飽くに於ては庖厨の肥ゆる丈それ丈反比例に家産の瘦せるものである、

妻の家に在は將の城に在が如し

是は細川忠興の夫人が謂ひたる詞であるが實に名言だ、婦人たるもの嫁して人の妻となればソツ／＼と外へ出歩てはならぬ恰も軍將が城に在りて士卒を指揮するが如くで總て沈着と云ふ事が肝要である、

美服繡裝は失儀を隠さず

如何に外面を飾り上げて紳士と胡麻化すも如何に皮想をメカン込んで淑女を氣取るも其外面皮想のみの裝飾では内部の失態は隠し通せぬもの



である、一休和尚の狂歌にもある「塗隠す漆の下の黒瘤なかく禿げぬ元の白木に」と同じ事だ「帷子や行儀見へ透く人の前」と云ふ句も是等を詠んだものである、

悋氣の角は眼中に生る

嫉妬の氣が「とたび心に萌した時には其敵手を見る眼の裡には必ず一種の怒氣の生ずるもので有て其容貌からして常に異なるものだ譬へにも「口ほど物を言ふ」と云ふ以心傳心の眼に喜びにも悲みにも怒りにも現はれ易いもので「秋波を注ぐ」とか「眼に角立てる」とか云ふ如くで、角は額に生るが普通ですが悋氣の角ばかりは眼中に生るものであるから慎しまねば成らぬと誡めたのである。

愛出者は愛反る 福往者は福來る

是は買誼新書と云ふ書に在る語で、他を愛すれば自己亦他に愛され、

福を施せば自己亦福を得ると云ふ意味です、畢竟「陰徳陽報」と言つた様なもの。

人を使ふは苦を使ふ

人を雇ひ使ふは易きに似て中々氣骨の折るゝものである、少しく白い齒を見すれば直ちに増長し、厳しくすれば陰へ廻つて悪い事を仕ると云ふ鹽梅にて人間を使役する呼吸と云ふものは餘程六かしいものだ、人を使ふからと言つて主人顔して威張て居ては雇人は心服して働くものではない、克く雇人の心にもなり氣も汲んで遣らねばならぬ古い句に「雪の日や彼も人の子樽拾ひ」又は「我子なら供にはやらじ夜の雪」など何れも人を使ふ上に就て詠んだ警句だ、世俗に「使へば使はるゝ」と云ふが如く人を使ふのは精神的使はるゝのである。

羽織は着物に合せて裁て